琉球大学学術リポジトリ

# ハワイの琉歌：「ハワイ琉歌史」試論



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 琉球大学法文学部<br>公開日: 2007-06-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/549 |

# ハワイの琉歌

## ―「ハワイ琉歌史」試論―

仲程昌徳

目次

はしがき
I 『日布時事（布哇タイムス）』『布哇報知（布哇ヘラルド）』（※）に見られる琉歌・琉球文芸
一、「琉歌」の登場
二、『布哇ヘラルド』の沖縄特集
三、「琉球文芸」紹介記事の登場
四、呉屋の琉歌・その足跡
五、呉屋の琉歌・その特質
六、呉屋の「琉歌解説」
II 『Hawaii Pacific Press』の創刊と琉歌
一、「琉歌」欄の創設と変遷
二、「琉歌」の時期

三、「ハワイ琉歌会」の登場
四、「ハワイ琉歌会」の変化
五、「ハワイ琉歌会」の分裂
六、「課題」に見るハワイ琉歌の特色
七、ハワイ琉歌の特質
あとがき

## はしがき

『Hawaii pacific press』の創刊号は、[1]文芸欄に琉歌、詩、小説を掲載している。[2]詩や小説の掲載はどの新聞の文芸欄にも普通に見られるものだが、琉歌はそうではない。

創刊号に琉歌を掲載し、以後途切れることなく毎号琉歌を掲載しているのは、琉歌の伝統がある沖縄で発刊されている新聞ではない。[3]邦字新聞であるとはいえ、ハワイで刊行されている新聞なのである。

「ハワイと沖縄のかけ橋」を謳って創刊された『Hawaii pacific press』は、「創刊にあたって」で「日本の最南端、太平洋と東支那海に点在する沖縄。その島々を愛する人々のために、ここにハワイ・パシフィック・プレスをおとどけします」と宣言し、加えて「最近文化的アイデンティティに対する認識が高まってきました。日本においても「郷土の文化を見直そう」という運動が各地方で大変さかんです。／沖縄はとくに異質性の強い独特の文化を形成し、今日ハワイにおいてもそれが継承されています。その異質性を愛し、それを誇りとすること—これは本

紙が目ざすもう一つの願いであります」と述べていた。

『Hawaii pacific press』が、「ハワイと沖縄のかけ橋」を掲げ、沖縄の「異質性を愛し、それを誇りとすること」をうたい文句にして創刊されたのは、他でもなく、ハワイに沖縄県系人が、数多く居住していることと関係していた。

沖縄から、ハワイへの移民が始まったのは、一八八九年。[4]「沖縄移民七十五周年」を迎える七十年代には、二十七人の来布に始まった沖縄移民は官約時代、私約時代、自由時代、呼び寄せ時代、移民禁止時代そして第二次世界大戦時代、戦後時代を経て、[5]三万二千人程度にまで増え、「政治・教育・実業各界に　沖縄人系の活躍」が目立つようになったと報じられるまでになっていた。[6]

『Hawaii pacific press』の創刊は、一つには「沖縄人系の活躍」が目立つようになったこと、さらには「今や楽園ハワイはホノルルを初め、各島に亘り正に琉球音楽琉球舞踊花盛りである」[7]といわれるような状況が現出していたことと無関係ではなかったはずである。そして、『Hawaii pacific press』が、文芸欄に琉歌の掲載を企画したのは、そのような沖縄系の人口の増加、さらには琉歌を詞章とする「琉球音楽」「琉球舞踊」の隆盛があったことによっていたといっていいだろう。

琉歌が、「異質性の強い独特の文化」の一つであることは間違いない。琉歌の掲載は、そのことを示すための一つの手段であったといっていいが、それは琉歌の詠み手の存在が予測できてこその企画であった。

琉歌の詠み手が、ハワイにいることを確信させた出来事としては、「琉歌募集」の成功を上げることができるだろう。

一九七七年八月十四日付『布哇タイムス』は「ハワイで初の琉歌募集」の見出しで「野村流協会支部十周年『ハ

ワイ琉球芸能誌』を飾る琉歌を一般より募集している。琉球芸能黄金時代のハワイに初めて琉歌が募集され同好者に興味を持たれている」との記事を掲載。「海外の琉球芸能を讃える歌」の「課題」で募集されたそれは「応募者六十三名」で「応募歌三百五十首」に及んだといわれているが、応募者の内訳をみるとハワイ四十一名、ペルー十九名、ブラジル二名、アルゼンチン一名となっている。[8] ハワイでなされた初めての海外居住者を対象とした琉歌募集は、予想を上回る成果を挙げたといっていい。

『Hawaii pacific press』が、琉歌の掲載を企画したのは、そのような経緯を知っての上であろう。同誌の創刊によってハワイの琉歌は、大きく浮上するが、ハワイで刊行されていた邦字新聞に、それまでまったく琉歌が見られなかったわけではない。

ハワイの琉歌は、いつ出発したか、そしてそれはどのような歩みをしてきたか、といったことを手始めに、その特異性を見て行くことにしたい。

## I 『日布時事(布哇タイムス)』『布哇報知(布哇ヘラルド)』に見られる琉歌・琉球文芸

### 一、「琉歌」の登場

一九五七年新年号『布哇タイムス』は、「責任の自覚」と題した呉屋真刈の随想を掲載している。随想は「責任の自覚」によって「職務上の発展」もあるといった表題通りのものであるが、随想とは全く関係なく付録のかたちで「尚ほ五十年振りに帰省して其の見た姿感じた事琉歌に詠んで新年のお楽しみに提供いたしませう」として、次のような琉歌を添えていた。

五十年振に我島立ち寄らば胸や張りつまつて涙が先に

昔畑道も都もなく今や文化花咲ちかる御代になたさ

いくさ世の跡に生れ島行きば道迷て立つど吾身の姿

戦世も済まち一昔なても今もうてちかに人の心

忘られていすれば面影や増さて昔眺めたる那覇の空や

羽地田圃を見て

急ぐ道やしが立ちよどて見ればよかてさめ稲のあぶしまくら

呉屋が沖縄を離れたのは一九〇四年八月二十五日。神戸で船を乗り換えハワイに着いたのが十一月三日。そして最初の帰郷が一九五六年[9]。五十数年振りに故郷を訪れた感慨は、胸が一杯になって「涙」が先にきたと歌われた最初の一首によく現れていよう。

五十年振りの帰省が、真っ先に涙を呼んだのは自然の情というものだろう。しかしその涙は、ただ懐かしいといっただけで溢れ出てきたものではなかった。道に迷ってしまうほどに変ってしまった村の変化、それは五十年という時間のもった自然な変化というよりも、地上戦があったことによる激変と関わっていた。

沖縄の戦闘が、いかに激しいものであったかは、終戦後いち早く布哇沖縄救済更生会、布哇連合沖縄救済会、沖縄復興布哇基督教後援会、レプタ会、沖縄救済沖縄連盟、布哇沖縄復興連盟等が出来[10]、「衣類輸送を初めとして種物、豚疫予防ワクチン、学用品、医薬、郵便再開と郷土訪問、豚輸送、乳山羊輸送と手を替え、品を替え」[11]行われた沖縄救援運動の中で聞き知っていたに違いない。しかし、沖縄戦が一寒村の様相を変えるほどに激しいものであったことまでは及びもつかなかったのである。道に迷って、その激しかったことを改めて知らされたばかりでなく、

いまだに戦争が生々しく人々の心を捉えていることを知った驚きが、そこには歌いこまれていた。

五十年ぶりに故郷を訪れた感慨を詠んだこれらの歌は、海外に渡っていった移住者たちの思いをよく伝えるものであったといっていいだろう。ハワイの琉歌の新聞への登場は、ハワイを詠んだ歌からではなく、「生れ島」を詠んだ歌から始まっていったのである。

琉歌を添えた呉屋の随想「責任の自覚」が掲載された紙面には、彼の他に上江洲芳子の「ハワイを去りて三十余年」、豊川走川の「童名」、比嘉静観の「羅府漫談」といった沖縄出身者の随想が見られるが、正月元旦号の紙面には、かなり早い時期から沖縄県系人の文章が掲載されている。

『布哇タイムス』『布哇ヘラルド』ともに終戦直後の四七、八年あたりから正月元旦号の文芸欄の紙面が旧に復し、短歌や俳句が見られるようになるとともに、随想類がかなり掲載されるようになる。例えば前者の四八年正月元旦号をみると吉本南月「和歌と琉歌」、喜屋武盛保「ユダヤ民族の話」、豊川走川「先生に囲まれて」、外間加津美「短編小説　招魂祭」、玉代勢法雲「痛快だったこと」、玉城文子「忘勿草」、比嘉太郎「砲塵下の迎春」といったのがあるし、五十年代に入って『布哇タイムス』五一年の正月元旦号には與世盛智郎「日本人の物指」、豊川走川「毎年始めて生れる」、山里慈海「流れと裸木」、比嘉静観「アロハシヤツ」、小波津幸秀「ハワイの味覚を語る　魚堅のサシミ」、やはり『布哇ヘラルド』の同年新年号には名護忍亮「日本人で終りたい」、比嘉静観「積極的に要求せよ」、玉代勢法雲「努力して得た贈物」[13]、山里慈海「一隅を照らす人」[14]、與世盛智郎「戦争へ行く若人へ」といったような随想が見られる。しかしそこには「琉歌」に就いて触れた文章はあっても、彼らの詠んだ琉歌は見られなかった。

呉屋真苅の名前が新聞に現れるのは、一九五三年の正月号『布哇ヘラルド』に掲載された「音楽の趣味と城戸松

月会に臨んで」あたりからである。以後同紙五四年の新年号に「信念と信仰」、『布哇タイムス』に「実力の養成」、五五年には「洗濯業者の組合組織を望む」といったのが見られる。呉屋が「洗濯業」を営みながら芸能に関心をもっていたことは、登場を飾った随筆から伺えるが、琉歌の発表は見られなかった。

呉屋の琉歌は、たぶん五十年ぶりの帰省と関わっている。こみ上げてくる思いを言葉にしようとしたとき、琉歌がやってきたのである。故郷を歌うには、生れ育った島の言葉しかなかったといっていいのだろうが、その発表を促したのはハワイにおける「沖縄」への注目と無関係ではなかったと思われる。

## 二、『布哇ヘラルド』の沖縄特集

沖縄への関心を高めたその一つは、一九五四年『布哇ヘラルド』元旦号の「ハワイの琉球芸能界」特集である。琉球行政主席比嘉秀平の「祝辞」を巻頭にして組まれたそれは、幸地亀千代「琉球音楽に就て　布哇の皆さんに望む」、小波津幸秀「民族芸術の保存」、上原興吉「隆盛を観る歓び」、西島宗二郎「努力と経験を」、池宮喜輝「琉球の楽譜　工工四に就て」、山里慈海「琉球文化の両面観」、仲間良樽金「布哇野村流音楽の元祖」、宮城栄吉「琉球音楽に就て」、伊佐嘉真「布哇島に於ける琉球音楽の今昔」、外間捷身「舞台装置」、川上善子「三線に就て」、比嘉静観「琉球芸能雑観」、玉代勢法雲「タンチャメーとトバルマー」、津波憲実「琉球の持つてゐるもの」、仲嶺真助「舞踊家に望む」といった随筆とともに、全十三面に渡って「布哇の琉球芸能界」に関する記事を掲載していた。

ハワイで活動している「琉球芸能」の全てを網羅していたといっていい特集記事が、沖縄県系人を鼓舞したことは間違いない。そしてそれは、これまで郷里の伝統文化に無関心であったものにも、幾分かの興味をおぼえさせたに違いないはずである。

沖縄への関心を高めたあと一つには、同じく『布哇ヘラルド』が、五四年の「特集　布哇の琉球芸能界」に次いで翌五五年の正月元旦号で「布哇沖縄県人実業界紹介特集号」を組んだことである。

特集が組まれた経緯に就いてそこには次のような記述が見られた。[15]

日本人が移民として最初にハワイに来たのは一八六八年（明治元年）、沖縄県人はややおくれて今から約半世紀前である。官約移民第三回船東京号が来航したときからかぞえると十八年おくれて来たのであるが、現在のハワイにおける沖縄出身者の発展はめざましく、その子（二世）、孫（三世）はハワイの中にとけこみ、アメリカ人としての教育を受け風俗習慣も白人とほとんどかわらず、同等の自由と権利とをもって育ちつつある。日系人という区別すらが知的社会であるいは実業界で消え去りつつあるとき、沖縄県出身者やその子弟について特にとりあげることは時代錯誤の感がないでもないことではあるが、現在の情況にあって、政治、経済、教育、法律、医学、技術、芸能その他あらゆる舞台に活躍している日系人の中で、他府県人よりおくれて来た沖縄県人が特に実業界において異常な発展を示していることは、一応注目に値するといえよう。

「布哇沖縄県人実業界紹介特集号」もまた、前の年の「特集　布哇の琉球芸能界」と同様に、沖縄県系人を鼓舞するものがあったであろう。そして、沖縄系であることへの誇りとともに、より強い連帯感を呼び起こしたのではないかと思われる。

沖縄県系人は、外からみるほど、一枚岩ではなかった。一九五一年、比嘉静観は「布哇に於ける沖縄人の長所と短所」を発表しているが、その中で「よい意味の競争は進歩の母であるが、詰らぬ競争ほど、醜いものはない」といい、近い例として、「沖縄救済団体がホノルル市に次ぎ〳〵と五つもできた」ことをあげ、「史上嘗て無き戦禍の同胞を救済する目的は一つなるに、どうしたのか、五団体も出来、悪口したり、デマを飛ばしたりして、夢中になっ

て金集め、物集め競争を演じたことは、あまり賞めた話ではなかった。だが、又一面、競争をしたために案外多くの救済品や救済物を、郷土沖縄へ送りえたのは、もつけの幸ひであつたとも云へる。斯くして物を郷里に送つたのはよいが、それに協同精神の裏付けがあつたら、もつと良き結果と影響を沖縄の悩める同胞にも、布哇にゐる郷土愛に燃えた同胞にも与へたのではなかろうか[16]」と書いていたし、また翌一九五二年一月一日号『布哇タイムス』に、儀間真福は「年頭、沖縄人に訴ふ」として、「布哇沖縄人連合会を組織するに際し種々難関にも遭遇したが結局現在の十四団体は一致し去る九月に発会式を挙行することが出来た」と書き起こし、「事件が山積している現状」とともに「布哇に於ける沖縄人一世達の移民としての優秀さが高く評価されそれが直接今日の琉球移民問題の調査に好い影響を及ぼしてゐる事実を感知した」といったことを書いた後で、「現在ホノルルに於ける沖縄人間の不調和と不統一は日本人間のみならず白人社会にも相当話題となってをり、誠に恥かしい次第である。今日周囲の情勢は在留沖縄人全体の融和と協力を要求してゐる。願はくば個人的感情の対立を捨て大きな気持ちになつて連合会に参加し、共に協力されん事をこの栄ある講和締結後最初の新年に際し一般沖縄人に訴へるものである」と締めくくっていた。

五四、五五年の特集「布哇の琉球芸能界」と「布哇沖縄県人実業界紹介特集号」は、比嘉静観や儀間真福の危惧した「不調和と不統一」を解消し「融和と協力」を促進させるのに大きな力になったばかりか、沖縄県系人に大きな自信と誇りをもたらし、さらには琉球の文化伝統に対する新たな関心を呼び起こしたといっていいだろう。

## 三、「琉球文芸」紹介記事の登場

呉屋の琉歌の登場は、一連の沖縄特集と無関係ではなかったと考えられるが、琉歌はいつ登場してもおかしくな

い状況にあったとはいえる。ハワイの邦字新聞には、琉球の伝統的な文芸作品に関する紹介が、かなり早くから現れていたからである。その走りとして一九一五年一月一日付『日布時事』に掲載された嘉数南星の「南島の詩歌」などを上げることができよう。

嘉数は、伊波普猷の著作によりながら、おもろの天体を賛美した一編と八重山の節歌「鷲ぬ鳥」を紹介したあとで、「琉球唯一の女詩人よしやの作歌を紹介しやう」として、

恨む比嘉橋や情無いぬ人の此の身渡さていかけて置やら

鳴ゆるもの聞かぬ鳴らぬもの聞す此の世からあの世近くなたら

の二首を紹介していた。

琉歌の紹介を、常套といっていいあと一人の代表的な女性歌人恩納ナベの歌を出さず、よしやの二首のみにしたのは、多分、伊波の「鳴ゆるもの聞かぬ」の歌の解説に魅了されたからに違いない。同歌の紹介にあたって嘉数は、「此の歌は大方彼女がこの世を去らうとした時の感じを歌つたものであらう、一体人の霊魂は其の体力の衰へるに従つて益々光沢を増すのであると云ふ、琉球の女詩人よしやも此の世を去らんとした時に仏蘭西の詩人ユーゴーが聞いた世界の美音を聞いたのではなからうか」と書いていたが、これは、伊波の文章を模写したものであった。[17] 嘉数が、伊波の解釈に魅了されたことは、そのことからでも明らかだが、「南島」の小さな島で詠まれた歌が、世界の文豪とその感受を同じくしていたといったことを、嘉数は、伊波にもまして訴えたかったに違いない。「琉歌」の何たるかをよく知らない読者に向って、それは最も効果のある方法であったといっていいからである。

嘉数が、沖縄の表現を、多くの読者に知ってほしいと考えていたことは、また「琉球戯曲執心鐘入一幕二場」を共通語に訳出して発表したことにも現れている。[18]

嘉数の標準語訳は、次のようになっていた。

若松「冬の夜寒も厭はで公用を託されし身の都へ急ぐ途中なれど、一寸先も見へぬ闇の夜、おゝアノ村里の燈(ともしび)の光りを便り、乞ふて今宵を明かさうか（若松人家に立寄る）

モシモシ・・・此の宿の内にものを頼み奉らざん、旅の者闇路に迷ひ居れば御情に一夜をかして賜はれかし。

女　「誰あれ、此の夜更けに宿をかしてとは・・・。親の留守なれば自由にならぬものを。

組踊の共通語訳は、東京の雑誌ではすでに一八九〇年代末頃に見られたが[19]、ハワイにおいては勿論初めてのものであった。

沖縄の伝統的な表現に関する紹介は、そのあと一九四一年一月一日付『日布時事』に掲載された山入端松正の随想「蛇皮線談義」等に見られる[20]。

山入端の随筆「蛇皮線談義」が発表された四一年の十二月には日米の戦争が始まる。一九四二年になると『日布時事』が『布哇タイムス』に、『布哇時報』が『布哇ヘラルド』に改題されていくように、「日本語新聞」が微妙な状態に追い込まれていく。戦闘関係記事が多くなり、文芸関係記事が減っていくなかで、沖縄の伝統的な文芸作品の紹介など吹っ飛んでしまう。

沖縄の文芸作品に関する紹介記事が再び現れるようになるのは日米戦終了後の四八年になってからである。その最初を飾ったのが吉本南月の「和歌と琉歌[21]」である。吉本はそこで「和歌と琉歌を研究しその中から哲学的真理を■まうとしてゐると遂に日本の歌と琉球の歌がよく似た所があることを発見したから茲に紹介しやうとするものである」と書き起こし、

明日からの明後日里が番のぼり、滝ならす雨の降らなやすが
（君が行く道の長手をくりたゝみ、焼き亡ぼさん天の火もがも　万葉集）
頼む夜やふけて音づれもなひらぬ、独り山の端の月に向て
（彼の子ろと寝ずやなりけむ旗薄浦野の山に月片寄るも　万葉集）
七門や越て九門にむじも、約束の無蔵やあてもなゐらぬ
（行けど行けど逢はぬ妹ゆえ久方の、天の露霜にぬれにけるかも　万葉集）
赤さこはですや美御殿とたんか、玉黄金里やわ身とたんか
（児毛知山若楓のもみずまで、寝もとあはもう汝はあどか思ふ　万葉集）
松の下露によくど袖ぬらす、頼むかげともて忍でいけば
（如何にせむ頼むかげとて立ち寄れば、なほ袖ぬらす松の下露　和歌）
ときはなる松の変ることないさめ、いつも春くれば色どまさる
（常盤なる松の緑も春くれば、なほひとしほの色まさりけり　和歌）
冬にのが空や花のちり飛ぶる、もしか雲の中春やあらね
（冬ながら空より花の飛びちるは、雲のあなたは春にはあらめ　和歌）
のがすどく我身にものよ思はゆしる、よそも眺めゆる月どやすが
（月見れば千々にものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはならねど　和歌）
思ちやけもすらぬ年の寄て渡る、仲島の小橋いのちさらめ
（年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山　和歌）

石な子の石の大瀬なるまでも、おかけぶしやめしやうれ我御主がなし
（君が代は千代に八千代にさざれ石の巌となりてこけのむすまで　国歌）
行きくれる年に無蔵ゆ先立てゝ、朝がほの浮世一人暮ち
（さいわいの如何なる人が黒髪の白くなる迄妹が声をきく　万葉集）
無蔵一人がゆへに親までもかなしや、庭のませ垣の匂のしふらしや
（吾はもは安見児得たり人みなの、得がてにすてう安見児得たり　万葉集）

といった琉歌十二首に、それらとよく似た発想になる和歌を並べ、最後に「昔の人は大胆に歌つてゐる。ハワイの歌人も大胆に歌つて欲しいと思ふ」と締めくくっていた。

吉本の論考は、いわゆる「日琉同祖」の再確認にあったといっていいだろう。そのこと事態に目新しさはないが、吉本の呼びかけは、大きな意味をもっていたはずである。彼の呼びかけに応じて「ハワイの歌人」の中に、琉歌を詠んだのがいたとしても不思議ではないが、少なくとも正月元旦号の紙面には見られない。

吉本の「和歌と琉歌」が掲載された四八年の新年号にはあと一つ「謡曲と組踊」と題した玉代勢法雲の随想が掲載されていた。

玉代勢はそこで自分が「謡」の稽古をするようになった来歴から書き起こし、謡曲と組踊との関係について述べる前に、沖縄の人はともかく「他県の人」にはあまりよく知られてないだろうからとして玉城朝薫とその五番についての紹介をした後で、

「二童敵打」は曽我兄弟を模したもので、琉球の忠臣護佐丸の遺児二童が父の仇、阿摩和利を討つといふ筋になつて居るし、「執心鐘入」は謡曲「道成寺」の作り替へであります。その他「銘苅子」は謡曲「羽衣」に示

唆を得たものであるし、「女物狂ひ」は「三井寺」や「墨田川」からヒントを得たものであることは明らかであります。

と書いていた。

吉本の「琉歌」紹介も、玉代勢の「組踊」紹介も、よく似た方法になるものであるばかりか、すでに先人によって指摘されていたことを繰り返したものであった。かつて、その方法は、「日琉同祖」を立証するものとして採られた方法とでもいえるものであったが、四八年に出てきた二つの随想にも、沖縄の帰属問題が、微妙に影を落としていたといえよう。

「和歌と琉歌」を書いて沖縄の伝統的な表現である「琉歌」の紹介をした吉本は、四九年には「美談女難記」という題で、「霊火にまつわる王女の恋」の伝説を紹介、五一年には「琉歌を味ふ」として程順則、与那原親方、具志川王子、宜野湾王子、浦添王子といった高位高官のものした琉歌を紹介、五三年には「巳歳に蛇の話」の題で沖縄に伝わる「神話」と「伝説」を紹介していた。

四〇年代末から五〇年代初期にかけての沖縄の伝統文芸をめぐる随想は、本土文芸との類似を強調するかたちで論述されていたが、「特集」号以降、変わり始める。

沖縄出身者が、沖縄に関する出来事を気安く書くようになる、というよりも、これまで蔑視の対象になっていたようなことがらを、大切な文化の一つであるとして取上げていくようになるのである。

村人会などのパーテーに行くと、地方訛を丸だしにして、じつに愉快なものである。それと縁のある話だが

—沖縄人（一世）は表むきの名の外に皆、小さいとき家族、もしくは親しい間柄で通用された童名（ワラベナ）をもつている。古い昔から明治時代までつづいた地方習慣の一つである。童名は、たとへば、徳（トクー）、松（マチュー）、樽（タルー）、次良（ジロー）、三良（サンダー）、

加那（カナー）、牛（ウシー）、亀（カミー）、蒲（カマー）、武太（ンター）、仁王（ニョー）といったようなものである。女には鶴（チルー）、鍋（ナビー）、真加（マカー）、呉勢（グジー）などの名がある。可愛い幼少時代の名だから、さらに「小（ぐわ）」という愛称をつけて呼ぶことがあつた。亀ならカミー小（ぐわ）、鶴ならチルー小（ぐわ）、といつたようなものである。村人会などのパーテーにいくと、大きいオツサンたちが、ハイ樽小（たるぐわ）、チャーガ、ガンヂユーイ（樽君、どうかネ、元気か）、ハイ加那（かな）チヤーガ・・・・などと童時代の名を呼びあつて、まことに和気あいあいたるものである。しかし、一世も数少なくなるにしたがつて、そんな雰囲気もだんだん消えていくようだ。さびしいことの一つである。

『布哇タイムス』一九五七年の新年号に掲載された豊平走川の「童名」と題した随想の全文である。

豊平は「童名」の消失を「さびしいことの一つである」という。これまで、風変わりなものの一つとして特別な目で見られていたことがらの消失を嬉しいこととしてではなく、逆に「さびしいこと」と感じるようになるのは、五十年代の半ばあたりからだと思われる。終戦からほぼ十年、沖縄の文化を大切に思う時代がやってきていたのである。

## 四、呉屋の琉歌・その足跡

呉屋真刈の「琉歌」も、その一つの現れであったといえよう。

一九五七年「責任の自覚」と題した随筆に付した六首の琉歌を発表した呉屋は、翌五八年には、「琉歌六首」として、次のような歌を発表している。

一、戦世の跡ぬ塵雲（ちりくぐん）晴れて新年の年にたてる力

二、人のいく先や笑ひしが知ゆみ焼きて蛍火の飛ばん限り

三、庭の白菊や露たよて咲つい吾身もお恵にすがて咲かな
四、いくさ世も終て平和からとめば世界あらそいの果てやかないさめ
五、原爆ゆ、つくて世の中や騒ぐ亦ん戦とめばみるきたつさ
六、愚かなる吾身もおくたらんごとに聖書ゆ日々学び心みがか

五八年の歌も、帰省して沖縄の激変を見たことが、微妙に影を落としているといっていいが、それだけではないだろう。真珠湾のある地で暮していたことからして、原水爆投下実験といったような「いくさ」に関わることがらに対して敏感に反応して不思議ではなかった。

呉屋の五七年の琉歌は、随想の後に「尚ほ」として、付け足しのかたちで発表されたものであったが、五八年には、琉歌のみの発表になっている。「琉歌六首」として掲載されたのは画期的な出来事であったといっていいだろう。

呉屋は、五八年の六首に次いで、五九年には「新年祝詠　琉歌」として次のような歌を発表している。

元旦の朝や空も晴ればれと心さわやかにさびもつかぬ
望みある中に朝夕うみはまて生活の道も立てて行かな
甘さしぶからさ善悪のもとや互いに味わてど浮世渡る
誠新聞や世の中の鏡日々の良し悪しも深く映て
朝夕わが願や波立たん如に平和なる御代にあらちたぼれ
四角三角に角たちやる心神たので行けばまるくなゆさ
神の御教は聞けばきく毎に肝の道開ち頭下がて

五九年の歌は、日々心にとめておくべきことがらを取上げていた。懸命に暮しの道を切り開いていくこと、苦楽

をともにすること、信心深くあれといったことが、そこには歌われていた。

五九年には、呉屋は『布哇タイムス』だけでなく『布哇ヘラルド』にも次のような琉歌を発表している。

月や馬のはいはい川の流れ年もうしちまて師走なたさ
年も新たまて思事ん叶て余り嬉しさの踊て遊ば
一家睦しく心打ち合ち浮世やすやすと渡て見ぼしや
◇たら人間や義理の道守◇浮世渡ゆしど人のかなめ
◇さある世界に只一人ともなわ身思て呉れる人の情

（◇箇所は、文字欠損、以下同）

『布哇ヘラルド』に発表された歌は、月日の経つのが早いといった歌に始まり、願い事がかなった嬉しさそして渡世の道とでもいったことが歌われていた。

『布哇ヘラルド』への琉歌の掲載も、呉屋から始まったといえるが、それもまた五七年の『布哇タイムス』への登場と同じく「青年期の修養」と題された随想に添えられて発表されたものであった。

五七年から欠かさず見られた呉屋の琉歌が、六〇年の新年号には、見られない。しかし、琉歌は見られた。

正月や食でん我ね年ん取らん何時ん若々と子供心
月日重にやい今年又去りは明真年迎けて笑い福い
年ぬ端や志けて新玉る真年幸福に輝る神の浮世
玉◇さかぢちや廻て又戻る年んく◇かわち若くなだみ
年ぬ瀬ん暮りて今年来る年やう願げ事かなて盛い繁い

知らぬ間に月日流りや過ち又ん共白髪多くなたみ

「新年即詠　琉歌」として掲載された金城源太郎の六首である。新年を迎えた感慨を歌いこんだこれらの歌は、新たな琉歌作者の登場と、さらなる琉歌作者の登場を予測させるものがあったが、金城の登場は六〇年の一度限りで、六一年にはまた呉屋一人になる。

六一年の呉屋の琉歌は、次のようなものであった。

今日や何立つる元日ゆやりば友達集らて互に飲まひ遊ば
元旦になりば明け雲と共にお年玉かざて屠蘇のお祝
夜明け白らじらと元旦なれば子孫打ちそろて千代のお祝
年の瀬に立てば過ぎし一年のあれこれのことも夢の心地
人の喜びや吾身も又嬉さ人の悲しみや吾身ん共に
人の花咲盛り十七八やすが何時もあの如に咲かなでもの
竹たので咲ちゆる朝顔の如にわ身も聖書頼ので心みがか
いくさ世の仕事親居◇◇◇童見ぶさうらちらさしやちよで暮す
君国のお為め戦かたる乙女記念碑なやい沙汰ゆ残ち
心から出じて働ちちやるしるし作てある米めの粒の美さ
奥山の小鳥木の枝に宿て春風にふける声のしほらしや
祖国日本や独立になたい騒ぐなよ復帰沖縄の民

「琉歌「元旦」」として『布哇タイムス』に発表された十二首である。五九年まで六首ずつの発表であったのが、

十二首の発表になったのは、六〇年に発表がなかったことによるのだろうか。

『布哇タイムス』に発表された十二首のうち最初の「今日や何立つる」の歌から「竹たので咲ちゆる」までの七首が、『布哇ヘラルド』にも「琉歌　元旦の歌」として掲載されている。全く同じ歌が、二つの新聞に掲載されていた。

呉屋の琉歌が『布哇タイムス』に見られるのは、翌六二年の「元旦の歌　琉歌」十首が最後である。それ以後は発表の場を『布哇ヘラルド』に変え、六三年には「一九六三年の新春を祝し琉球道歌集」として二十三首、六五年には「琉歌　新年若水初夢」として十七首を発表していた。

琉歌の発表は、そのように呉屋に代表されるといっていいが、六〇年には金城の琉歌があったし、その他に比嘉盛勇の次のような歌が見られた。

一ツトセー人と生れて人の為め社会の為に尽くすのが神の教の人の道
二ツトセー二親御恩を忘れるな一人前になす迄の茨の苦労も子の為に
三ツトセー見る物聞く物変り行く社会の波に流されず何時も心は神仏
四ツトセー喜ぶ心は福の神長生きし度いと思うなら人吾共に喜ばせ
五ツトセー何時も楽しく世の中わ音楽芸術身に付けて世界平和の為になれ
六ツトセー無理は世間に通じない情の糸もきらさずに譲る心に人なびく
七ツトセー難儀する人見る時は力になって助け合い
八ツトセー病める人には情掛け老先短き年寄を労わり慰め力づけ
九ツトセー転ばぬ先こそ杖もいる頼る世間に鬼はなし心の杖の持方で

十トセー遠くあの世を去つて後金も名誉も脱ぎ捨て人の値打はわかるなり

六二年『布哇タイムス』に掲載された「数え歌　琉歌」と題された一編である。「数え歌」に「琉歌」と付した右の歌は、一見して分るように共通語で表現されたものであるが、琉歌であることに間違いなかった。

琉歌は、普通、三十音からなる偶数律の方言表現を指すが、それだけを琉歌というのではない。「口説」と呼ばれる形式になるのは七、五の奇数音律からなっていた。比嘉の「数え歌」は「口説」に類し、「一ツトセー」の形は、数え歌として人々に親しまれてきた形式になるものであった。比嘉が「数え歌」を「琉歌」としたのは、ハワイで「琉歌」といえば、三味線に載せて歌われる歌の詞章として考えられていたことを語ってもいよう。

## 五、呉屋の琉歌・その特質

一九五七年『布哇タイムス』の六首にはじまった呉屋の琉歌は、五八年六首、五九年十一首、六一年十九首、六二年十首、六三年二十三首、六五年十七首、七三年十首、七八年三首の合計九九首に及んでいる。

五七年の琉歌は、新年とかかわりなく作られたものであったが、翌五八年以後に詠まれた歌は、新年元旦号に発表するために作られたものであったといっていいだろう。新年元旦号を飾った歌には、当然新年を寿ぐ内容の歌が多く見られた。

元旦の朝や空も晴ればれと心さわやかにさびもつかぬ（一九五九、夕）

年も新たまて思事ん叶て余り嬉しさの踊て遊ば（一九五九、へ）

今日や何立つる元旦ゆやりば友達集らて互に飲まひ遊ば（一九六一、夕、へ）

元旦になりば明け雲と共にお年玉かざて屠蘇のお祝（一九六一、夕、へ）

夜明けしらじらと元旦なれば子孫打ちそろて千代のお祝（一九六一、タ、ヘ）
新玉の年やうれし顔しちよて互に喜びの祝ひ語ら（一九六二、タ）
元旦になれば明け雲と共にお年玉かざて屠蘇のお祝ひ（一九六二、タ）
戦世乃跡ぬ塵雲も晴れて新玉の年にたてる力（一九六五、ヘ）
若水や鏡影うつち美さ波立たん如に国も静か（一九六五、ヘ）
渡海や繋がりて初夢の嬉さ親お側兄弟と語る吾が家（一九六五、ヘ）
親子いちやていかたらひやしやしが初夢どやてさ吾肝あまず（一九六五、ヘ）
年も新たまて思事も叶て余り嬉しさの踊て遊ば（一九六五、ヘ）
戦世ぬ跡ぬ塵雲も晴れて新玉の年に立てる力（一九七三、ヘ）
若水や鏡影うつち美さ波立たん如に国も静か（一九七三、ヘ）
渡海や繋がりて初夢の嬉さ親お側兄弟と（語る）吾が家（一九七三、ヘ）
元旦になれば明け雲と共にお年玉かざて屠蘇のお祝ひ（一九七三、ヘ）
夜あけ白らじらと起きて旗立てさ今日は新年の年始め（一九七三、ヘ）
夜明け晴ればれと元旦になれば子孫打ち揃て千代のお祝（一九七三、ヘ）
心はればれと打ち揃て千代のお祝君が代歌い御祝さびら（一九七三、ヘ）

（タはタイムス、ヘはヘラルドの略、以下同）

元旦号への掲載ということもあって「元旦」を寿ぐ内容の歌が多く見られるのは当然であったが、もちろんそのような歌ばかりではなかった。五七年の六首がそうだったし、一九七八年『布哇タイムス』新年号に掲載された

「私の健康法」と題された随想の後に添えられた三首もそうである。

五八年から七三年にかけて『布哇タイムス』『布哇ヘラルド』二紙の新年号に見られる新年と関わって詠まれた呉屋の琉歌は、全部で十九首。そのうち重複が六首、うち一首は、三度掲載されていることで都合十二首ということになるが、新年号への掲載ということを考慮にいれれば、十五、六年間で十二首というのは、決して多い数ではなかったといっていいだろう。

正月の歌が多くないということは、ハワイの正月が、正月らしくなかったということよりも、正月を表現する言葉が、決りきっていた、ということによるのではなかろうか。

元旦、新年、新玉の年、屠蘇、お年玉、若水、初夢、君が代といった言葉の結びといえば「踊て遊ば」「飲まひ遊ば」「祝ひ語ら」「千代のお祝」「御祝さびら」といったような形になるだろうし、新しい年を迎える気持ちを表す言葉といえば「心さわやかに」「心はればれと」「余り嬉しさの」といったものになっていく。

新年を寿ぐ歌を歌うということになると、語句、内容ともに大きな制約を受けるに等しいものがあったといわざるを得ない。呉屋の歌は、そのことをよく示してもいたが、そこには、「移民」でなければ詠めない次のような歌も見られた。

渡海や繋がりて初夢の嬉さ親お側兄弟と語る吾が家（一九六五、へ）

親子いちやていかたらひやしやしが初夢どやてさ吾肝あまず（一九六五、へ）

二首のうち、とりわけその二首目の歌は、故郷におれば一緒に祝えたであろう新年を思う気持ちがよく現れているもので、「移民」の思いのこもった歌になっていた。

新年を歌った呉屋の歌は、全体の十分の一ほどのもので、その他新年と関係のない歌が圧倒的に多いが、それら

は、大きく二つに分けられるであろう。その一つは、次のようなものである。

◇たら人間や義理の道守◇浮世渡ゆしど人のかなめ（一九五九、へ）

奢ひ高ぶりは禍ひの基ゐみすみす思みちみて低く暮らせ（一九六二、タ）

拝でかみやびら御万人の情心におみ染めて忘すてなゆみ（一九六三、へ）

みがきるんすれば光さすためし朝夕吾が心みがちおかな（一九六五、へ）

後の一つは次のようなものである。

愚かなる吾身もおくたらんごとに聖書（ふみ）ゆ日々学び心みがか（一九五八、タ）

神の御教は聞けば聞く毎に肝の道開ち頭下がて（一九五九、タ）

竹たので咲ちゆる朝顔の如にわ身も聖書（ふみ）たので心みがか（一九六一、へ）

朝毎に顔の垢おとす如に聖書頼でうとさ肝乃よごれ（一九六五、へ）

前者の歌の群と後者の歌の郡との間では、基本的な違いは認められないという見方もできるが、前者の群は身の律し方、後者の群は、「神の御教」に従いたいとする心構えを歌ったものである。それらの歌は、一種の教訓歌とでもいえるものであった。

呉屋の琉歌は、そのように教訓歌になっている点に大きな特色が見られたが、呉屋の気持ちの最もよく現れたものといえば、次のような歌であったのではなかろうか。

千里へだてても思事や一つ文やかよわちよて節ど待つる（一九六五、へ）

渡るあの鳥のものやちよんいりば島の親兄弟のいやいすしが（一九六五、へ）

新年詠歌のなかにも見られたが、ここにはより直接的な形で故郷を離れて暮らす「移民」の気持ちがあらわれて

いたといっていいだろう。

六、呉屋の「琉歌解説」

呉屋の「琉歌」がハワイの新聞紙上に最初に発表されたのは、五七年。それから七八年までほぼ二〇年間、正月元旦号のみの掲載であったとはいえ、ハワイ在住日系人に沖縄にも独自の短歌形式になる表現があると言うことを、呉屋の「琉歌」は教えたはずである。その功績の大きさはいうまでもないが、呉屋の功績は「琉歌」の発表だけにとどまらない。あと一つ見落とせないものがあった。一九六三年『布哇タイムス』に掲載された「琉球歌謡の解説」に始まる仕事がそうである。呉屋はそれを、

△「かぎやで風」

今日の誇らしや　なおにきやなたてる　つぼでおる花の　露きやたごと

これは、かぎやで風節の本歌で大新城親方「安基」の詠歌でした。歌詞のナウニジヤナタテル、は何に譬えようぞ何にも譬えるものはないとの意味です。チユチヤタグトは露に行きあつた如くという意味です。全体の意味は今日の嬉しい事は何にも譬えるものがない丁度花の蕾が露をおびて美しく咲いたように大層嬉しいとの意味です。

といったように、歌の節名そして歌をあげた後に作者、語句の意味、歌の内容を記し、さらに「伝説によれば」として、

尚円王統第四代尚清の薨去後王位継承に就いて長男尚元「俗にチーグ王」と次男尚艦心「異母弟」とが争いました。

長男は唖者と云う理由で廃し弟を擁立したがよいとの支持者が多くなりましたが、大新城親方は父上尚清の遺言を固く守って聞かない、世子尚元の御前にひれ伏して「一言何とか言われないなら私は切腹して先王にお詫びせねばなりません」と短刀を腹に当て、鋭く迫りました。

唖者尚元は大いに驚き「待て大新城」と一言洩らされた大新城は夢ではないかと感激の余り「今日の誇らしやなおにぎやなたてる蕾でおる花の露きやたごと」と即吟して踊ったとの事です。

従来祝儀の初めに「稲まずん節」を歌っていましたが、尚元王以来この歌詞をかぎやで風節で歌うようになったとの事でした。

といったようなことを記していた。

「琉球歌謡の解説」は、「かぎやで風」に続けて「鳩間節」をあげその歌詞と「全体の意味」を述べたあとで、やはり「伝説に依れば」として、歌の由来を記していた。

呉屋の記述は、そのように節名、歌詞、語句の意味、歌の内容そして歌にまつわる伝承を書くといった形をとり、「かぎやで風」の解説から始めていた。それは呉屋も触れているように、その歌が幕開けを飾るものとして知られていたことによっていよう。またその表題を「琉球歌謡の解説」としたのは、「かぎやで風」のような琉歌だけでなく「鳩間節」のような八重山でうまれた節歌をも紹介したいと考えていたことの表れであろう。

一九六四年には、呉屋は「琉歌歌謡の解説」を「琉歌解説」と改め「阿嘉のヒゲ水や上かいど吹きゆるカマド小が肝や上り下り」「なれよなれ茄子しとの家の茄子ならなしよて茄子嫁名たちゆめ」「あても喜ぶな失ても泣くな人乃善し悪しや後ど知ゆる」「たが宿がやゆら訪ねやに見ぼしや月に琴の音のかすかなゆし」の四首を紹介している。

「琉歌解説」の方法も、歌にまつわる物語を紹介するといったかたちをとっている。そしてその形は六五年の

「琉歌解説」、六八年には表題が変わり「琉歌歌物語」、六九年には再度表題が変り「琉歌物語り」、『布哇タイムス』での最後の琉歌紹介となった七〇年の「琉歌物語り」まで同じであった。

呉屋の琉歌紹介は『布哇タイムス』だけに見られるのではない。『布哇タイムス』での掲載がみられなかった六七年には『布哇ヘラルド』で、「琉歌の解説」として「瓦屋節」「スキ節」「仲間節」を紹介していたし、六九、七〇、七一年には『布哇タイムス』と同じく「琉歌物語り」と題して紹介していた。

呉屋のそれは、六三年『布哇タイムス』に掲載した「琉球歌謡の解説」に始まり、七一年『布哇ヘラルド』に掲載した「琉歌物語り」まで、一部全く同じ文章が見られたとはいえ、息の長い連載であったといっていいだろう。

呉屋の連載は、方言を母語として育った人たちだけのためになされたのではなかった。一九六九年『布哇ヘラルド』に発表した「琉歌物語り」で、呉屋は新年の挨拶をしたためた後、次のように書いていた。

さて琉球野村流音楽協会秋の演奏会で、二世・三世の血気盛りの青年たちが熱心に歌のけい古や三味線の練習に打ちこんでいる姿を見て欣びにたえず、ペンを執る気になりました。

ハワイで生れ、ハワイで教育を受けながら、わが沖縄の音楽を研究するということは、父祖の郷土に対する愛情を喚びおこし、ひいては父祖の恩ちょうにも目ざめ、親孝行にもつながると考えられるからであります。こうして一世によって種子をまかれた沖縄の音楽が、二世・三世によってハワイに根を下し、りっぱに実を結ぶことは、誠に意義あることであります。

そこで気のつくままに、琉歌の解説を簡単に行って参考に供することにしました。新年のお楽しみともなれば幸甚と存じます。

六九年の「琉歌物語り」は、「気のつくままに」といいながら、決してそうではなかった。これまでが、まさに

「気のつくまま」であって、六九年のそれは「干瀬節」「子持節」「散山節」といったように、二揚げになる独唱曲の名曲・名歌を並べていた。それは他でもなく「二世・三世の血気盛りの青年たちが熱心に歌のけい古や三味線の練習に打ちこんでいる姿を」見たことによる選択であったといっていい。

呉屋の「琉歌」の「解説」が、改めて琉歌への関心を高める働きをしたことは間違いない。それは彼の琉歌とあいまって、彼の大きな業績であったといっていいが、「琉歌」の「解説」は、彼が始めたわけではなかった。呉屋のそれは、明らかに吉元増英の「芸は身を助く」を踏襲していた。

吉元の「芸は身を助く」が、『布哇ヘラルド』に掲載されたのは一九五九年である。吉元はそこで、北谷マウシの歌として「波もとなどなと風もそよそよと盗で行く牛の鳴かんうつみ」をあげてそれにまつわる話と、知念績功の歌として「有ても喜ぶな。失つて泣くな。人の善し悪しや後ど知ゆる」をあげ、やはりそれにまつわる話を書いていた。

吉元は「芸は身を助く」として、北谷マウシも知念績功も歌がうまかったことで殺されないですんだといったことを書いていたが、呉屋もまた一九六四年の「琉歌解説」で、同じく「芸は身を助く」の題で、知念績功について触れていた。両者の違いは、知念の歌を聞いた賊が「泣いている」隙に知念は逃げたという吉元に対し、呉屋は「無我の境」に入ったところを逃げたとした点にあった。

「琉歌」の「解説」という点では、吉元が先覚者であった。

吉元が『布哇タイムス』に「琉歌を味ふ」を書いたのは一九五一年。吉元はそこで「私は琉球の古歌を玩味して感心した。流石は守禮の邦の歌である。終戦後の同胞に是非読んで頂きたい、そして郷里の復興は先づ道徳の再建から始めたいものである」と書いていた。「琉歌」の「解説」を通して「道徳の再建」をしたいと考えた点でも、

吉元が呉屋の先輩であったのは間違いない。

琉球文芸の紹介という点では、呉屋は決して先覚者であったわけではない。彼の先に吉本を初め何人もいたし、彼らにならっての紹介であった。そしてそれらはほとんど先人の説を再説したものであったといっていいが、異国の地で、長い間持続して琉歌の紹介にあたったということでは、彼の右に出るものはいない。呉屋が、それだけ琉球の文芸を大切に思っていた証拠である。

## Ⅱ『Hawaii pacific press』の創刊と琉歌

### 一、「琉歌」欄の創設と変遷

一九七〇年代の中頃から『布哇タイムス』『布哇ヘラルド』のいずれの新年号にも見られなくなっていた琉歌が、同年末『Hawaii pacific press』が創刊されたことで、大きく浮上してくる。『Hawaii pacific press』の創刊号が出たのが、一九七七年十一月三十日。創刊号の文芸欄は、巻頭に「琉歌」として、

比嘉良信

沖縄訪問

雲の上から観りば　ちゅちかんどやしが　島に住む人の　心ひろさ

仏草華の花や　色赤く咲かち　世けんうまんちゅぬ　心ともさ

ブラジルにて

流れ来る三線に　しばしきゝとりて　ブラジルの吾が身　故郷(くに)の恋ひさ

与儀喜厚

三味の歌聞きば　日々の営みん　心若々と　暮らすうりさ
歌と三味線や　此の世界の宝　我肝慰みさ朝ん夕さん
嘉利吉の歌に　三味ん又まさて　心晴々と　なるがしんち

川上善子

四海や浪立てて　硯水なちん　思事やあまた　書ちん足らん
人ぬ至情に　深山忘りゆみ　はなしわん飛ばん　かぐぬ鳥や

知念　房

十年一昔　走川ぬごとに　夢の間にみぐる　うちゆさらみ
天が下中に　ハワイゆかすとに　楽園ぬ国や　またとねさみ
住みなりしハワイ二の故郷ゆでむぬ　うみはまて子孫光てらさ

呉屋真苅

七転びくるで　ひやみかち起きて　わした沖縄　世界に知らさ
年ゆたんともて　ただ遊でなゆみ　一事どんすりば　国の宝
へだてねんぐとに　一人助きだしき　浮き世渡ゆしど　天のかなみ

といったように比嘉良信、与儀喜厚、川上善子、知念房、呉屋真苅の作品を其々四句四行に分かち書きして掲載していた。

ハワイの邦字新聞の新年号に初めて琉歌を発表したのは呉屋真苅であった。『Hawaii pacific press』の「文芸」

面に「琉歌」欄が設けられたのを受けて、呉屋が登場しているのは何の不思議もないが、呉屋の他にも琉歌の詠み手がいたのである。

『Hawaii pacific press』が、琉歌欄を設けたのは、「ハワイと沖縄のかけ橋」をうたい文句にして創刊されたことにあるが、ハワイにおける沖縄文化への着目は、「多文化主義」の主張に呼応するものであったといっていいだろう。[22]

王朝の崩壊とアメリカへの併合という歴史が消してしまったハワイの文化の復興が主張されるなかで、沖縄移民が根付かせたハワイの中の沖縄文化への着目もあったのである。琉歌欄の創設は、そのことをよく示す一つであった。

創刊とともに開設された琉歌欄は、以後毎号欠かさず琉歌作品を掲載し続けていくが、全く同じかたちで続いていったわけではない。その変化の経緯を記せば、およそ次のようになるであろう。

一、七七年十一月（創刊号）から「琉歌」として掲載される。
二、八〇年四月から「琉歌」「ハワイ琉歌会」の二本立てになる。
三、八一年十月から「ハワイ琉歌会」の作品は囲みになる。
四、八八年九月、これまで文芸欄の最初に置かれていた「琉歌」が最後にまわされる。
五、九〇年八月、「ハワイ琉歌会」の作品が囲みをはずされる。
六、九一年一月、「本流琉歌会」が登場する。
七、九一年二月から「琉歌」として一本化される。

一九七七年から二〇〇〇年までの琉歌欄の歩みをたどるとそのようになる。二十三年の間には、さまざまな出来

事のあったことがわかるが、それを、さらに大きく分ければ、

一「琉歌」の時期、

二「琉歌」「ハワイ琉歌会」の時期、

三「ハワイ琉歌会」「本流琉歌会」の時期

といったようになるであろう。

## 二、「琉歌」の時期

創刊号の琉歌欄に登場していたのは比嘉良信、与儀喜厚、川上善子、知念房、呉屋真苅の五名であったが、その後、次々と新しい詠み手たちが登場してくる。煩を厭わず、一九八〇年一月まで、琉歌欄に登場してきた名前を記していくと次のようになる。

一九七八年一月

知念房、呉屋真苅

(新)[23] 比嘉盛勇、大城夫人、ジョン伊芸、Y比嘉、照屋孚俊

一九七八年二月

Y比嘉、照屋孚俊、大城夫人、与儀喜厚、比嘉盛勇、川上善子

(新) 伊芸孝助、福元隆蔵

一九七八年三月

照屋孚俊、与儀喜厚、比嘉盛勇、Y比嘉生、知念房

（新）J・S夫人

一九七八年四月

川上善子、照屋孚俊、J・S夫人、Y比嘉生、与儀喜厚、比嘉盛勇

（新）大嶺マジル

一九七八年五月

大嶺マジル、比嘉盛勇、福元隆蔵、Y比嘉生

（新）宮城カメ、U大城、ケネト金城

一九七八年六月

福元隆蔵、比嘉盛勇、大嶺マジル、与儀喜厚、U大城、宮城カメ、T比嘉生

（新）金城憲一

一九七八年七月

与儀喜厚、福元隆蔵、宮城カメ、大嶺マジル、T比嘉生

一九七八年八月

大嶺マジル、Y比嘉生、与儀喜厚、福元隆蔵

（新）仲本得信、川上清吉

一九七八年九月

与儀喜厚、Y比嘉生、福元隆蔵

（新）上原イソ

一九七八年十月
与儀喜厚、Y比嘉生
（新）大城カント（在東京）、大城光助、大城よし子、天願マツ
一九七八年十一月
Y比嘉生、与儀喜厚
（新）比嘉盛善（アルゼンチン）、山里敏雄
一九七八年十二月
比嘉盛勇、Y比嘉生、与儀喜厚
（新）當真しせい
一九七九年一月
比嘉盛勇、福元隆蔵、伊芸孝助、与儀喜厚、川上清吉、比嘉生、山里敏夫
（新）島福カメ
一九七九年二月
与儀喜厚、天願マツ、福元隆蔵
（新）ミツコ・ウイルソン、仲座弘子
一九七九年三月
与儀喜厚、Y比嘉、福元隆蔵、天願マツ
一九七九年四月

Y比嘉生、与儀喜厚

一九七九年五月

比嘉盛勇、Y比嘉生、与儀喜厚

一九七九年六月

与儀喜厚、Y比嘉生、比嘉盛勇

（新）与座仁明（ペルー）

一九七九年七月

与座仁明、当真しせい、与儀喜厚、Y比嘉生

一九七九年八月

与儀喜厚、Y比嘉生

（新）伊良波長正（那覇）

一九七九年九月

与儀喜厚、Y比嘉生、与座仁明

一九七九年十月

与儀喜厚、Y比嘉生

一九七九年十一月

比嘉盛善、Y比嘉生、与儀喜厚、川上清吉

一九七九年十二月

Y比嘉生、与儀喜厚、福元隆蔵

（新）比嘉慎一（南米リマ市）

一九八〇年一月

福元隆蔵、比嘉盛勇、Y比嘉生、与儀喜厚

（新）宮城栄吉（ロス）、野地トシ子

創刊から八〇年一月までの琉歌欄は、Y比嘉生、与儀喜厚、福元隆蔵、比嘉盛勇といった常連組に、時に新しい読み手が加わっていくかたちになっているが、七八年十月「在東京」の大城カント、翌十一月には「アルゼンチン」の比嘉盛善、七九年二月には「加洲」のミツコ・ウイルソン、六月には「ペルー」の与座仁明、八月には「那覇」の伊良波長正、十二月には「南米リマ市」の比嘉慎一、八〇年一月には「ロス」の宮城栄吉といったように、ハワイ以外の国名を付した作者の参加も見られるようになる。ハワイを中心にして琉歌の輪が大きな広がりを見せつつあったことがわかる。

琉歌欄にはまた「夫婦船」（七八年六月、比嘉盛勇）、「年歩み口説」（七八年十二月、仲本得信）、「花笠音頭」（七八年十二月、内間キクエ）、「移民節」（七九年八月、Y比嘉生）といった題名の付された歌も見られる。「音頭」はともかく、「夫婦船」「移民節」の歌詞も「口説」も「琉歌」の一種といえることからして、琉歌欄を飾って当然であった。琉歌欄に、そのような多様な形式の琉歌が見られた時期でもある。

## 三、「ハワイ琉歌会」の登場

二期を飾る「ハワイ琉歌会」の登場は、八〇年の四月であるが、その兆候は八〇年の二月に現れていた。

二月の「学芸」欄は、やはり「琉歌」から始まっている。そこには琉歌欄の常連であるウイルソン夫人、与儀喜厚、Y比嘉生の歌とともにこれまで見られなかったほど数多くの歌が掲載されているのである。そしてそれらの歌と常連組の歌とでは明らかに異なるものがあった。

常連組の歌は、雑詠集といっていいものであった。そしてそれは、これまで「琉歌」として掲載されてきた歌がそうであったように、統一した課題のもとで読まれた作品が集められていたのではなかった。しかし、常連組以外の歌は、あきらかに統一した課題のもとで読まれたものであることがわかるのである。

布哇琉歌会誕生や嬉れさ手とって互に育て励ま（比嘉良信）

ヌアヌ虹下に三十文字の集い七彩や豊か夢に染みら（川上清吉）

布哇てる島に琉歌の会創立さ珍らさや嬉さ祝いさびら（当真しせい）

ハワイてる島に琉歌の会発起ちわしたペルーまでおよび召せさ（伊芸銀勇）

常連組以外の歌は、右に見られるように「布哇琉歌会誕生」を祝って詠まれた歌を集めたものであったことがわかる。そしてそれは、翌三月の琉歌欄まで見られるものであった。

『Hawaii pacific press』の「学芸」[24]欄に「ハワイ琉歌会」の名前が現れるようになるのは八〇年の四月からである。学芸欄は、これまでの「琉歌」に「ハワイ琉歌会」が加わっていく。

二期の始まりは、八〇年二月と考えていい。二月の学芸欄には、「ハワイ琉歌会」の名はまだ現れないが、琉歌欄の常連の後に、次のような名前が並んでいる。

川上善子、伊芸幸助、安慶名蕉風、比嘉武盛、比嘉静観、新垣貞雄、又吉節子（ペルー国）、比嘉洋雨、比嘉良信、山城千代（ペルー国）、川上清吉、大城徳助、安和ウシ（ペルー国）、読谷山久代、比嘉盛吉（亜国）、

与座仁明（ペルー国）、照屋農人、澤岻善友、崎原盛助、福元隆蔵、仲宗根信栄（ペルー国）、与儀喜厚、野地敏子、当真しせい、小橋川秀康、伊芸銀勇（ペルー国）、玉城武孫（ペルー国）、當真嗣栄、仲間源助、金水英子、比嘉亀吉、金武朝武、与那覇真淳

そして三月にも、同じ顔ぶれで「ハワイ琉歌会」の誕生を寿ぐ歌が掲載されている。

一九七九年十二月一日付け『Hawaii pacific press』は、「琉歌の作り方習う　ハワイ琉歌会六日発足」の見出しで、次のような記事を出していた。

琉球芸能研究家の比嘉武信氏が世話役となって琉歌研究のためのクラブを結成する準備が進められていたが、指導教師に比嘉静観氏と沖縄存在の川平朝申氏が決まり、いよいよ来る十二月六日（木）午後一時半からヌアヌＹＭＣＡで初会合を開き「ハワイ琉歌会」を結成することになった。

このクラブでは、琉歌の鑑賞の仕方を勉強したり、琉歌の作り方を習い、出来上がった歌は沖縄の川平氏のもとへ送り添削指導してもらうことになっている。

「ハワイ琉歌会」は、『Hawaii pacific press』が報じていた通りに、十二月六日発足する。「ハワイ琉歌会」が十二月六日に発足したことは、『布哇ヘラルド』紙も報じていた。[25] 同紙は「ハワイ琉歌会の発会座談会は、六日午後一時十五分からヌアヌＹＭＣＡで開かれ」たと会の発足を伝えると同時に、

一、申込会員は三十一名、会運営は金武朝武、川上清吉、比嘉武信の三氏を幹事として推薦し委任した。

二、比嘉静観先生の指導の下に毎月第二木曜日午後一時十五分からヌアヌＹで研究会を開催。

三、互選句は沖縄に送り川平朝申先生の添削指導を受ける。

四、第一回研究会は来年一月十日（木）に開催、題は、「祝琉歌会誕生」、一人三首以内を一月七日までに幹事宛

送ること。

と四項にわたる取り決めを行ったことも報じていた。

『Hawaii pacific press』八〇年二、三月に掲載された歌が、発会座談会の席上で決められた「題」に基づいて詠まれたものであったことが右の四からわかる。それらの歌が「ハワイ琉歌会」会員の作品であることは明らかだが、学芸欄はその名前を記載してなかったのである。

「ハワイ琉歌会」の名前が現れる四月の同会掲載作品には、「ハワイ琉歌会第二回作品課題「沖縄正月」応募者三十一人、九十三首。会員互選句を川平先生が添削したもの」との前書きが見られる。そして、作品の後に「評」として、「今回の作品は、つぶ揃いと申しましょうか、「沖縄正月」と言う限定された出題で、会員の皆様の懐しい思い出と郷愁が、どの歌にも溢れていて、大変よいと思いました。／添削などとは、おこがましいことだとは思いながら少々朱をいれた作品もありますが、果たして良くなったか？は心配です。原作の方が矢張りよいのかもしれませんが。／とにかく皆さんの琉歌は仲々立派な表現をしておられて敬服いたしております。出来るだけ失礼にならぬ様にと思っており、添削などとはひかえているつもりですが、気付いた点を少々手を入れてみました」といった言葉が見られる。

「ハワイ琉歌会」の発足は、『Hawaii pacific press』の琉歌欄の創設が機縁となったといっていいだろう。「ハワイ琉歌会」の生みの親であったといっていい『Hawaii pacific press』は、最初、同会の作品の取扱いをこれまでの琉歌欄で間に合わせようとしたところがあった。

四月からは、「琉歌」と「ハワイ琉歌会」の二本立てにする。二本立てにしたのは、題詠によらない作品と題詠によって詠まれた作品といった相違があったことによっていよう。「琉歌」には、自由に詠まれた作品が掲載され、

「ハワイ琉歌会」には題詠に基づいて詠まれた作品が掲載された。

『Hawaii pacific press』は、最初課題を表示することなく掲載しているが、四月以降、「課題」或は「題」として出題名を提示していく。二、三月の「祝琉歌会誕生」、四月の「沖縄正月」のあと、五月以降の課題を見て行くと次のようになっている。

五月　課題「祝沖縄移民八〇年」
六月　題「草分け同胞賛歌」
七月　題「アロハ外間先生」
八月　「雑詠」
九月　課題「沖縄エイサー」
十月
十一月　九月課題「十五夜」
十二月　十月課題「ガジマル」

一九八〇年五月一日付『Hawaii pacific press』は、「祝沖縄移民八〇年」を課題にした作品を掲載していたが、その後に「尚、五月課題は「アロハ外間先生」二首。六月課題は雑詠二首」というのが見える。

新聞に掲載された「アロハ外間先生」は七月、「雑詠」が八月。そのことから分るように、課題は、二か月前に提示されていた。紙面は、十月の掲載作品の課題名を落としているが、十月のそれが「具志堅用高」であったことは、八月の「雑詠」作品掲載の後に八月課題として「具志堅用高」とあることからわかる。

一九八一年には、次のような課題が登場してくる。

一月　課題「沖縄文化祭」
二月
三月　課題「ディゴ」
四月　二月課題「虹」
五月
六月　四月課題「ウリジン」
七月
八月
九月
十月

新聞紙面は、課題の表記についてそれほど注意深くなかったのであろう。その多くを落としているが、今、それを、作品掲載のあとに付された課題の予告を参照して補っていくと、二月「十二月課題年末雑詠」、五月「三月課題春」、七月「爬竜船」と「雑詠」、八月「マンゴ」または「雑詠」、九月は「七月課題祝叙勲川平先生」と「雑詠」、十月は「フラダンス」となる。課題に「雑詠」を加えるようになるのは、四月課題「ウリジン」からである。「雑詠」を加えたのは、課題がむずかしいということもあったが、あとひとつ「新人勧誘のため」ということもあった。[25]

八一年十一月になると「ハワイ琉歌会」作品は、「琉歌」から切り離され、囲みになり、特別に扱われるようになる。「ハワイ琉歌会」が、その存在をしっかりと認められるようになったということだろう。

八一年六月『Hawaii pacific press』は「『琉歌会』の発行へ　ハワイ琉歌会一周年」の見出しで、創立一周年

を記念して「琉歌集」を発行すること、その内容は「ハワイ琉歌会メンバーが作った琉歌約二百五十首と創立一周年を迎えての感慨などを綴った随筆を多数」収めたものになるだろうといった代表幹事の談話を報じていた。

ハワイ琉歌会創立一周年記念『琉歌集』が刊行されたのは、九月吉日。『琉歌集』は、メンバーの随想と歌を中心に編集されているが、会の動向を記録した「書記類は語る」から見えてくるのは、さまざまな問題を抱えながらも、月例会は途切れることなく行われていたことである。

「ハワイ琉歌会」の作品が囲みになる八一年十一月からの課題を見て行くと次のようになっている。

十一月　「アロハ恵美子」
十二月　「紅型」
八二年一月　「守礼門」
二月　第二四回「夢」
三月　第二五回「琉歌集」
四月　第二六回「浮世」
五月　三月課題「希望」
六月　第二八回「雨」
七月　五月課題「復帰」
八月　第三〇回「花」
九月　七月課題「言葉」
十月　第三二回「免状」

十一月　第三三回課題「雲」
十二月　第三四回「旅」
八三年一月　第三五回「当山久三」
二月　第三六回「年忘り」
三月　正月課題「泡盛」
四月　二月課題「誠」
五月　三月課題「癩病」
六月　四月課題「山」
七月　五月課題「苦瓜（ゴーヤー）」
八月　六月課題「ピクニック」
九月　七月課題「海」
十月　八月課題「世間」
十一月　課題「風車」
十二月　課題「新北風」
一九八四年一月　十一月課題「妻」
二月　「引退」
三月　正月課題「門松」
四月　課題「子年」

五月　三月課題「遊び」
六月　四月課題「清明祭」
七月　五月課題「母」
八月　六月課題「火山」
九月　七月「雑詠」
十月　八月課題「夏休み」
十一月　九月課題「秋」
十二月　十月課題「閏年」「閏月」
一九八五年一月　十一月課題「琉歌」
二月　十二月課題「祝五周年」

一九八四年十二月五日、「ハワイ琉歌会」は、創立満五周年を迎えたことで、祝宴を開く。

一九八四年十二月六日『布哇ヘラルド』は「ハワイ琉歌会、創立五周年祝う」の見出しで、「みやびやかな琉歌の歌の同好の志が集まったハワイ琉歌会（主宰・比嘉武信）が創立五周年を迎え、昨五日午前十一時からカピオラニ大通りのチャック・ワゴン食堂で祝賀昼食会を開催した。／同昼食会にはゲストを含めて五〇人近くが出席した」と報じている。

祝賀昼食会で、ハワイ琉歌会主宰の比嘉武信は、次のような挨拶をしていた。

私たちが、細やかな五周年祝賀会を催しますには三ツの目的があります。

その一ツ、ハワイ琉歌会は、創立当時四〇名の会員がおりましたが、現在は半分の二〇名に減りました。何

故だろうか、との自己反省。

その二ツ、ここにお集りの皆さんは、それぞれ一国一城の主であられるから、貴方御自身、又は弟子たち、或は友だちに、ハワイ琉歌会の宣伝をお願いして、一人でも多くの歌詠みを勧誘して頂きたいこと。

その三ツ、ハワイ文化人であられる皆さんと、仲良くして横の繋がりを持ち、文化交流を計って行きたい。

以上の三ツを、念願しておりますので、宜しく御協力を御願い申し上げます。

五周年祝賀会は、「反省」「勧誘」「文化交流」の三つを「目的」とし「念願」し開催したとしていたが、その大きな目的は、いうまでもなく会員を増やしたいとのことにあった。五年の間に会員が半減していたのである。

『布哇ヘラルド』の記事には見られないが、『Hawaii pacific press』八五年一月号「ハワイ琉歌会五歳、歌仲間を招き祝宴開く」の見出しになる記事には、三月には第二の「琉歌集」を発刊するとの発表があった、というのが報じられていた。

「ハワイ琉歌会」の「創立満五周年記念誌　ハワイ琉歌会同人集」が「祝　日本人官約移民百年祭」をうたって刊行されたのは八五年七月吉日。『ハワイ琉歌会創立一周年記念　琉歌集』の刊行からわずか四年の歳月で、第二集を刊行している。

会員が減っていく中で、活動が途絶えることのなかったのは、先に見た毎月の課題一覧が示していようが、最初の作品集が刊行された八一年九月以降の研究会への会員の参加状況を見て行くと

八一年

九月（九名）、十月（七名）、十一月（九名？）、十二月（七名）

八二年

一月（十一名）、二月（五名）、三月（七名）、四月（七名）、五月（九名）、六月（八名）、七月（七名）、八月（十名）、九月（十二名）、十月（九名）、十一月（十一名）、十二月（十三名）

八三年

一月（九名）、二月（不明）、三月（六名）、四月（不明）、五月（七名）、六月（六名）、七月（不明）、八月（六名）、九月（五名）、十月（四名）、十一月（六名）、十二月（不明）

八四年

一月（六名）、二月（七名）、三月（七名）、四月（五名）、五月（五名）、六月（六名）、七月（七名）、八月（六名）、九月（七名）、十月（六名）、十一月（五名）

となっている。十二月は、研究会がなく、五日に五周年記念昼食会を開催していた。

研究会への参加者は、多い時で十三名、少ない時で四名、そして平素は五、六名といったように極めて少ない。研究会への出席が最も少なかった一九八三年十月には「研究会四人出席で淋しい」とあり、八四年二月には「研究会は次の七氏が常連となる」として金武朝武、上原芳子、川上善子、比嘉良信、川上清吉、比嘉武信の名前があげられていた。七月には「研究会七名出席。会員も減って現在二十名。七月応募歌二十八首は淋しい。会員募集に協力して下さい」といった記述が現れる。八四年十二月現在の会員は比嘉武信、川上清吉、比嘉良信、比嘉秋子、比嘉静観、与儀喜厚、川上善子、大城徳助、仲間源助、比嘉亀吉、仲宗根松郎、与座仁明、伊芸孝助、上原芳子、金武朝起、伊芸銀勇、又吉節子、坂井敏子、堀田恵美子、新里リサ、仲座弘子の二十一名に安里貞雄、澤岻千恵子、島福カメ、比嘉太郎の四名の賛助会員を加えて二十五名。結成当時に比べれば、確かにその数は半減したが、作品の発表に熱心な会員が残ったといえる。[27]

『Hawaii pacific press』八四年十二月一日の「ハワイ琉歌会」作品は、十月課題の「閏月・閏年」の作品十四首を掲載。作品のあとに「十二月例会なし、五日（水）フラミンゴ・チャックワゴンで五周年記念昼食会。来年一月課題「丑年」二月課題「初興し」会場外の投句も歓迎」というのが見られる。

これまで会員への課題、連絡事項に使われていた箇所に、始めて「会員外の投句も歓迎」といった言葉が現れる。会員の減少、詠者の固定化といった問題が鮮明になってきたことのあらわれである。

会員外への投稿呼びかけは「ハワイ琉歌会」の先細りを案じての策であった。名簿上の会員は二十五名を数えたが、研究会への出席者は七名が常連となり、時に「四名」。「淋しい」という言葉が発せられて当然であった。

そのような中で「ハワイ琉歌会」の作品が、本場の沖縄で紹介されるようになる。

『Hawaii pacific press』は八四年九月一日、比嘉武信の「ハワイの琉歌」を掲載している。比嘉はそこで、ハワイ琉歌会が五周年を迎えて琉歌集を編纂中であることを紹介するとともに、「最近になって琉球新報や政経情報誌」が「ハワイ・パシフィック・プレスの琉歌を転載して琉歌高揚に拍車をかけている」こと、さらに『青い海』が一三一号から琉歌壇、狂歌壇を設けているので、ハワイの琉歌会員に投稿を呼びかけて欲しいといった手紙が「ハワイ・パシフィック・プレス」社宛にあったこと等を紹介していた。

比嘉の紹介記事が、「淋しい」思いをしていた「ハワイ琉歌会」会員を喜ばせたことは間違いない。ハワイの琉歌が、「琉歌昂揚に拍車をかけている」といった情報に興奮しないものはいなかったはずである。八四年の十二月には、あと一つ彼らを喜ばせたのがある。『Hawaii pacific press』に「Okinawan poem club」として紹介された琉歌英訳の登場である。

Romanization (Okinawann Dialect)

UyubaraN kui ni
KwadzaN nati Pele ya
Chi nu namida nagacti
Waga mi kugachi
Poet・Kawakami Seikichi

Translation
Love unfulfilled !
Pele now a volcano
Sheds tears of blood,
Scorches her body

Translated by Misako Funakosi

Funakosiによって訳された琉歌作品は九首。川上の作品を始め、九首は八四年の六月課題「火山」作品中から選ばれている。[28]

琉歌の本場ともいえる沖縄の新聞への転載および雑誌への寄稿呼びかけそして英訳の登場といったことが、会員の減少を気にしていたハワイ琉歌会に大きな励ましを与えたことは間違いない。[29]

## 四、「ハワイ琉歌会」の変化

一九八五年二月一日号『Hawaii pacific press』は、十二月課題「祝五周年」を掲載。三月一日号は正月課題「丑年」の作品が掲載され、三月、四月の課題とともに改めて「会員外の投句歓迎」の文字が現れ、「連絡は比嘉武信」へとして、彼の電話番号が記されていた。

「ハワイ琉歌会」の作品は出発当初、「Mrs Eiko Goldwater」宛に送られていたのが、一九八一年三月から「Mr Takenobu Higa」になる。それがそのまま続いていたのが、一九八七年七月一日号に「応募歌宛先は左の如く変更しました」として「Mr Yosinobu Higa」の名前が現れ、翌八月一日号から「応募歌宛先は次へ」として「OKINAWA POEM CLUB」の英語名が現れる。

一九八七年八月には、そのように作品の宛先が比嘉武信から比嘉良信へと変わっていくが、八五年二月の「祝五周年」のあと、宛先が変わる八七年八月までの作品は、次のような課題のもとに掲載されている。

三月　正月課題「丑年」
四月　二月課題「初興し」
五月　三月課題「三月遊び」
六月　四月課題「四月馬鹿」
七月　五月課題「記念誌」
八月　六月課題「父」
九月　七月課題「移民百年祭」
十月　八月課題「妖怪日」

十一月　九月課題「老人」
十二月　十月課題「手紙」
一九八六年
一月　十月課題「手紙」[30]
二月　十二月課題「沖縄」
三月　一月課題「寅年」
四月　二月課題「バレンタイン」
五月　三月課題「写真」
六月　四月課題「雑詠」
七月　五月課題「コーヒー」
八月　六月課題「綱引」
九月　七月課題「扇」
十月　八月課題「御見舞」
十一月　九月課題「赤花」
十二月　十月課題「選挙」
一九八七年
一月　十一月課題「芋」
二月　十二月課題「年ぬ夜」

三月　一月課題「卯年」
四月　二月課題「女郎馬」
五月　三月課題「思い」
六月　四月課題「新築」
七月　五月課題「御祭り」

作品の宛先が、比嘉武信から比嘉良信に変わったのは五月、事務一切を、比嘉良信が引き継いだことによる。[31] 引継ぎは、武信が良信を「後継者」[32]と考えていたことによる。比嘉良信の「ハワイ琉歌会五周年記念誌裏話」[33]によると、比嘉武信が比嘉良信を会の良き相談相手と考えていたことがわかる。実際、比嘉良信が中心になって「五周年記念誌」の準備が進められたことからしても、比嘉武信が、比嘉良信を良き助力者として考えていたことは間違いないが、そこには比嘉武信の仕事がにわかに忙しくなったという事情があった。[34]

比嘉武信が『新聞に見るハワイの沖縄人九〇年―戦前編―』を刊行したのは一九九〇年十月。彼が、その仕事に着手したのが一九八七年二月。仕事を進めていくうちに、それが長い時間を要する仕事になりそうだということがわかってきたのである。[35]

作品の宛先が「OKINAWA POEM CLUB」になった八七年八月以降の課題は次のようになっている。

八月　水無月課題「大王」
九月　七月課題「甘蔗」
十月　葉月課題「哀悼大城徳助氏」
十一月　九月課題「復帰十五年」

十二月　神無月課題「円高」

八八年

一月　十一月課題「朝」

二月　十二月課題「豆腐」

三月　正月課題「辰年」

四月　二月作品「ララ救援物資」

五月　三月作品「花」

六月　四月作品「歓迎」

七月　五月作品「友」

八月　六月作品「十年」

宛先が変わってから、掲載される作品の課題の表記に大きな変化が見られる。一つは、月の表記、後の一つが、「課題」を「作品」にしていることである。そして、八八年の九月には、新聞の「文芸」面の構成にも変化が見られた。

文芸欄に「ハワイ琉歌会」と「琉歌」とが見られるのは変わらないが、短歌、俳句等の作品の前に置かれていた「琉歌」が、九月からそれらの後に置かれるようになる。

琉歌欄は、文芸面の最後に回されたが、「ハワイ琉歌会」の作品は相変わらず特別な扱いを受け、次のような課題の下に、囲みで掲載されていく。

九月　七月作品「祝比嘉カツ刀自風車」

十月　八月作品「ケンスル」
十一月　記載なし（九月課題「情」）
十二月　十月作品「愛」
八九年
一月　十一月作品「沖縄タイムス賞」
二月　十二月作品「ゴルフボールは喰えぬ」
三月　正月作品　巳年　蛇
四月　二月詠歌「祝金武朝起氏叙勲」
五月　三月作品「お茶」
六月　四月作品　雑詠

「ハワイ琉歌会」の作品は、八九年の六月から「雑詠」となり、その後は、九〇年の三月、「正月作品　午年馬」が見られるだけになる。課題を出さなくなったのである。

九〇年一月、これまで「Okinawa Poem Club」となっていた「問い合わせ先」の記名が、「Hawaii Ryuka Kai」になる。またこれまで「会員外の投句歓迎」というかたちでの呼びかけであったのが、九〇年四月には「琉歌を詠んで見ませんか」に変わっている。

九〇年八月には、これまで囲みで扱われていた「ハワイ琉歌会」の作品が、囲みをはずされ、「琉歌」の前に置かれるようになり、九月からは、「琉歌」の後ろに廻される。

八九年中頃から『Hawaii pacific press』は、「ハワイ琉歌会」の扱いを、少しずつ変えていっている。それは、

会の変化を受けてのものであったといっていいだろう。会が、少しずつ変化し始めていたのである。

一九八九年十二月六日、「ハワイ琉歌会」は、創立十周年を迎える。

一九九一年一月『Hawaii pacific press』は、「ハワイ琉歌会　十周年記念誌『微風』を発行」の見出しで、次のような記事を出していた。

ハワイ琉歌会（比嘉良信会長）は、一九八九年十二月六日に十周年を迎えたのを記念して、記念誌「微風」を発刊した。

同書は濃紺のハードカバーで、二五六ページ。一千冊が印刷された。十年間にわたる同会の歩み、会員の琉歌などがおさめられている。

ハワイ琉歌会は一九七九年に会員相互の親睦と琉歌に関する活動の展開研鑽を目的に創立されたもので、那覇市在住の川平朝申氏を師と仰ぎ、教えを受けていたが、同氏は現在病気療養中。会員は二十三人で、その殆どがハワイに住んでいるが、南米ペルー、そして沖縄県からの会員もいる。

『微風』は、一九八五年から一九八九年までの会員二十三名の作品を収録するとともに、会員が師と仰いだ川平朝申の祝辞をはじめ会員の随想を収めている。

比嘉武信は「会員のお陰です」と題した随想の中で、六十五歳のときハワイ琉歌会をスタートさせたこと、川平朝申の指導を仰いできたこと、十周年を迎えて会員それぞれがやっと「自分の琉歌」を作れるようになったこと、「戦後一世」が入会してきたことで、琉歌会も不動のものになったといったことを述べた後で「一九八七年より会の運営を比嘉良信君、屋比久ゆき子さん、比嘉静江さん達に御願いし自分は「在布沖縄人九〇年の歩み」探索をライフワークとして専心させて頂いています」と書いていた。

一九八七年八月、作品の宛先が比嘉武信から比嘉良信へと変わっていったのは、会の運営を比嘉良信に「御願い」したことによるものであった。比嘉武信から会の運営をまかされた比嘉良信は、作品の宛先を「ハワイ琉歌会」ではなく、「OKINAWA POEM CLUB」とし、八九年の六月からは「課題」をもうけず「雑詠」とし、九〇年の一月には「OKINAWA POEM CLUB」を「Hawai Ryuka Kai」に戻す。

一九八九年十二月六日に十周年を迎えた「ハワイ琉歌会」は、記念誌『微風』を発刊し、その結束の強さを示したといっていいが、一九九一年一月には、それが必ずしもそうではなかったことが明らかになっていく。

## 五、「ハワイ琉歌会」の分裂

一九九一年一月号『Hawaii pacific press』紙の琉歌欄は、これまでと異なり「ハワイ琉歌会」「琉歌」の二本立てではなく、「ハワイ琉歌会」と「本流布哇琉歌会」の二本立てになっていた。「本流」を名乗る会が登場しているのである。

「ハワイ琉歌会」には、

金武桃人、与儀喜厚、城間茂、小森花、仲間源助、屋比久ゆき子、ウイルスン美津子、比嘉良信

といった名前があり、「十二月課題「雑詠」、正月「未年、羊」です。会員外の方の投句歓迎。問合せ」はとして、比嘉良信の電話番号が記されている。

「本流布哇琉歌会」には

屋比久孟清、比嘉武信、川上清吉、伊波房、坂井敏子、島清子、重見洋子、堀田恵美子、上原芳子、比嘉静江、比嘉美智子、比嘉秋子、仲座弘子

といった名前が並び、「本流ハワイ琉歌会連絡は比嘉武信」として比嘉武信の電話番号が記されている。

「本流布哇琉歌会」の名前が『Hawaii pacific press』の琉歌欄に現れるのは九一年の一月からであるが、その兆候は、「ハワイ琉歌会」の作品が囲みで掲載された最後の九〇年七月に現れていた。八月から囲みがなくなるのは、偶然の一致であったといえないこともないが、七月から比嘉武信の作品が、「ハワイ琉歌会」の作品欄ではなく、「琉歌」の作品欄に現れるようになり、八月からは明らかに琉歌欄は、これまでの琉歌欄とは別のかたちになっていく。そして九一年一月の紙面となっていくのである。

『Hawaii pacific press』は、九一年一月、琉歌を「ハワイ琉歌会」「本流布哇琉歌会」の名のもとに掲載していたが、それは、一度限りのものであった。翌二月には、両者の名前が消えてしまう。二月からは、これまで見られた「ハワイ琉歌会」の名称も消え、ただ「琉歌」として一括掲載されるようになる。

「ハワイ琉歌会」の名称が消えたのは、琉歌欄が、「ハワイ琉歌会」会員だけの琉歌を掲載しているわけではないことからであろう。二月以降の琉歌欄は、「ハワイ琉歌会」「本流布哇琉歌会」の名前は消えたが、両会がそれぞれにまとめて作品を発表していることがわかるものとなっている。そしてその形が、その後ずっと続いていくことになる。

九一年一月『Hawaii pacific press』の琉歌欄に「ハワイ琉歌会」と「本流布哇琉歌会」の名前が現れて以来の、ハワイ琉歌壇の主な動きを『Hawaii pacific press』誌上でたどっていくと、九一年四月一日号の「本流ハワイ琉歌会　沖縄波上琉歌会と提携」といった記事がまず眼に入ってくる。

本流ハワイ琉歌会（比嘉武信主宰）は沖縄の「波上琉歌会」（新城安永会長）との提携を申し入れていたが去る二月十二日受託の通知を得て琉歌の交流が可能となった。

波上琉歌会は古い伝統を誇る琉歌グループで、古典琉歌を継承し、先人達が詠んだ琉歌を基にして研究を続けている。そのため各メンバーが提出する琉歌は旧かなづかいと定められている。

これから毎月歌会で詠まれた琉歌がハワイに送られることになり、ハワイからも作品を沖縄に送る。

本流ハワイ琉歌会では、この交流受諾の報を受けて会員一同は歓喜した。比嘉主宰は、「良き師を得たと感謝しています」と喜びを語った。

「本流ハワイ琉歌会」は、右の記事からわかるように、比嘉武信の主宰になるものであった。比嘉武信は「ハワイ琉歌会」の発会者であった。その当人が、「ハワイ琉歌会」を向こうに回して、新たな会を発足したのである。

比嘉武信が、「ハワイ琉歌会」の運営から身を引いたのは、先にも触れた通り「在布沖縄人九〇年の歩み」の編纂という「ライフワーク」に専心したいということによっていた。そして比嘉は、それに熱中し、九〇年十月『新聞にみる　ハワイの沖縄人九〇年（戦前編）』を刊行する。それで、彼の「ライフワーク」が、完成したわけではなく、そのあと「戦後編」の刊行というのがあるが、「戦前編」の刊行で一段落といったことがあった。

比嘉が、「ハワイ琉歌会」とは別に「本流布哇琉歌会」を発足させたのは、一度降りた会に戻りにくかったといったことだけによるのではない。その点については、「印刷費前払い問題」「会報担当者交替」「不信任案提出」「何故反論しなかったか？」「和解交渉・最後の決裂」等をはじめ「本流ハワイ琉歌会創立まで」に詳しい。[36]

一九九四年一月号『Hawaii pacific press』は、「ハワイ琉歌十五周年宴　功労者五氏を表彰」の見出しで次のような記事を出している。

ハワイ琉歌会は十二月五日、料亭「夏の家」で創立十五周年と十三周年記念誌発刊記念の合同祝賀会を開き、同会会員、琉歌愛好者ら約六十名が出席した。

会の冒頭、故照屋孚俊氏ら既に故人となった会員五名に対し、出席者が黙祷を捧げた。

記事はそのあと比嘉良信会長が「沖縄の文化である琉歌は一九七九年十二月六日、ハワイ琉歌会の手によりハワイ州に移植され、以来十五年」たったこと、「創立以来四つの会誌を発行」してきたこと、「詠んだ歌は一万首以上」になると述べたこと、続いて前会長の仲間源助の挨拶、来賓の仲嶺真助の挨拶があったこと、そして功労者として仲間源助、酒井英子、新里リサ、比嘉栄子、比嘉良信の五名が表彰されたといったことを報じていた。

記事は、「ハワイ琉歌会」が「創立十五周年」と「十三周年記念誌発刊記念」の「合同祝賀会」を開いたというものであったが、「創立十五周年」はともかく、「十三周年」の記念号発刊は、異例である。「ハワイ琉歌会」が、「祝沖縄移民入植九〇年祭」を祝うかたちで創立十周年記念誌『微風』を刊行したのは一九九〇年であった。創立十三周年記念誌『アロハ』が刊行されたのは一九九三年。その間三年足らず。『アロハ』は「祝　首里城復元」を記念しての刊行でもあるという形をとっていたとはいえ、「十三周年」記念というあまりなじみのない形での刊行であった。[37]

『アロハ』の「編集後記」は、比嘉良信が書いているが、それは次のようになっている。

十三周年記念誌は十周年記念誌と比較して頁数は少ないけれども、と言いますのは一九九〇年、九一年、九二年と三ケ年間の琉歌を収録したものであり、各界の祝辞等を一切掲載せず編集し、勿論広告記事はありません。之は会員納得の上の事であり、斬新さを取り入れた積りです。其の上琉歌には添削は加えてありませんので、会員各自の真の姿が羅列されてあり、其の人柄も読み取れる位い、真のハワイ琉歌会誌として編集したのであります。

一九九〇年六月主宰であった比嘉武信氏が退会され、ハワイ琉歌会との関係を断って以来三ケ年余の今日、

当ハワイ琉歌会の発展は目覚しく、平穏無事の日々の内に、会の目的に添っている事を、この十三周年記念誌は如実に物語っています。

比嘉良信の「編集後記」は、実に含みの多い文章になっているといえようが、その最も大切な一点は、比嘉武信の影響をいかに消すかということにあった。

「ハワイ琉歌会」は『アロハ』の刊行で、明らかに「本流ハワイ琉歌会」とは別であることを宣言したばかりでなく、「ハワイ琉歌」の本流は、「ハワイ琉歌会」にあることを宣言したといっていいだろう。それは「ハワイ琉歌十五周年宴」を開いたといったことだけでなく、「功労者五氏を表彰」したことによく現れている。「功労者」の中に、当然比嘉武信が入っていてしかるべきであろうが、彼の名前がない。そして、そこには、「本流布哇琉歌会」の会員は一人も入っていないのである。

「ハワイ琉歌十五周年宴」は、「ハワイ琉歌会」と「本流布哇琉歌会」とを鮮明に分かつための「宴」であった。

比嘉良信を中心にした「ハワイ琉歌会」[38]は、「十三周年記念」という変則的な記念号であった『アロハ』の刊行後、一九九九年には「ハワイ琉歌会創立二十周年記念誌」『貫花』を刊行する。『貫花』もまた、『アロハ』がそうであったように「本流ハワイ琉歌会」の会員の作品を収録することなく刊行されたものであった。

「本流布哇琉歌会」の会員は、「ハワイ琉歌会」と袂を別って以来、記念誌を刊行することをしてないが、『Hawaii pacific press』への投稿を精力的に行っているばかりでなく、二〇〇〇年の八月には、祝賀会を開いていた。『Hawaii pacific press』は、「本流ハワイ琉歌会十周年　なごやかに記念祝賀会を開く」の見出しで、次のような記事を出している。

沖縄の伝統的な詩歌である琉歌を学ぶ本流ハワイ琉歌会の十周年と沖縄語（ウチナーグチ）を教えるラナキ

ラ沖縄語教室（共に主宰は比嘉武信氏）の五周年を祝った合同祝賀会が、七月二十三日（日）ウィステリア・レストランで開かれた。

約七十人が出席して午前十時からＫＺＯＯ放送局の上原みさアナウンサーの司会で始められた祝賀会は、最初に先亡会員に黙祷を捧げた後、琉歌会ならびに沖縄語教室への功労者として城間チヨコ、上原リリー、屋比久ゆき子、川上エトル、比嘉静江、比嘉秋子、浅井易、島清子、堀田恵美子の各氏へ感謝状・表彰状と金一封が送呈された。

中でも浅井さんは東京出身で琉歌を研究しているが、自らも歌作を行い恩納村商工会琉歌大賞特別賞を受賞したことから今回表彰された。

「本流布哇琉歌会」もまた、「ハワイ琉歌会」の向こうを張って、「十周年」を祝っていたのである。

「本流布哇琉歌会」が、「ハワイ琉歌会」と異なる点を挙げるとすれば、「沖縄語」の教室を開いているといったところにあろう。「琉歌」が「沖縄語」を基本としている以上、「沖縄語」を学ぶ教室が必要であることは明らかであった。教室について、主宰の比嘉武信は「習うというより聞きに来る人が多い」と語ったと記事は伝えているが、基本的な問題と取り組んでいこうとする姿勢がそこにはうかがえる。そして、その成果といってもいいのが、浅井易の「琉歌」であった。

浅井は「本流布哇琉歌会」会員として『Hawaii pacific press』誌上に琉歌を発表するといったことだけにとどまらず、「恩納村商工会琉歌大賞」へ応募し「特別賞」を受賞するほどになる。浅井の活動は、ハワイで琉歌を学んだという一点だけとっても、特別のものがあるはずである。

ハワイの琉歌は、「ハワイ琉歌会」「本流布哇琉歌会」両会の存在によって、ともに競い合うかたちで、それぞれ

に成果をあげているともいえる。浅井の「恩納村商工会琉歌大賞特別賞」はその一つの表れであったが、沖縄で開催される「琉歌大会」の入賞者を見ていけばそのことがさらによくわかるはずである。

一九九二年浦添市が行った「琉歌で綴る鳴響む浦添」では「ハワイ琉歌会」の会員五名の作品が入選、そのうちの一首が優秀作として表彰されているし、同じく一九二二年「第二回恩納琉歌大賞」に六名の作品が入選、また「沖縄戦終結五十年事業」として那覇市が主催した「三千人の三線大会」の歌詞募集に際しては入賞者八人を出していた。

一九九五年七月一日号『Hawaii pacific press』は、「当真嗣正氏の入賞」と題した比嘉武信のエッセーを掲載しているが、比嘉はそこで那覇市の「沖縄戦終結五十年記念事業」として行われた「三千人の三線大会」の歌詞募集に、日本はもちろんアメリカ、南米諸国から「二四五〇点」が寄せられたなかで、「入賞者八人のうち本流ハワイ琉歌会員の当真嗣正氏が特別賞を受賞」したといい、「海外からはハワイが唯一の入賞」であったと書いていた。「ハワイ琉歌会」の会員の入賞、そして「本流ハワイ琉歌会」会員の入賞といったことを報じた記事によくあらわれているように、両会は、競って沖縄で行われる「琉歌募集」に応募し、入賞者を出しているのである。

「ハワイ琉歌会」「本流ハワイ琉歌会」の存在は、ハワイの琉歌壇を活性化しただけでなく、沖縄の琉歌壇に、大きな刺激を与えたといっていいだろう。

## 六、「課題」に見るハワイ琉歌の特色

「ハワイ琉歌会」三月作品の掲載された一九八九年五月一日号は、「四月以降十二月の課題は「雑詠」です。会員外の方の投句のチャンス到来、奮って御応募下さい」という呼びかけを行っていた。その呼びかけに応じて、会

員外の投句があったようには見えないが、翌六月一日号から確かに「雑詠」として作品は掲載されるようになる。長い間続いてきた課題による詠歌が終ったのである。

「ハワイ琉歌会」の課題は一九八〇年二月、三月に掲載された「祝　琉歌会誕生」に始まり一九八九年五月一日号掲載の三月作品「お茶」まで、十年にわたり続いていた。[39] ハワイ琉歌の特色の一端は、その課題にも現れていたはずである。

ほぼ十年間にわたる課題の数は百十種。それらを見て行くと、まず祝琉歌会誕生、祝沖縄移民八十年、草分け同胞賛歌（八〇年）、沖縄文化祭（八一年）、琉歌集、免状（八二年）、祝五周年、記念誌、移民百年祭（八五年）、新築（八七年）、歓迎、十年、ケンスル（八八年）、沖縄タイムス賞、ゴルフボールは喰えぬ（八九年）といった移民や琉歌会関係の出来事を取上げたもの、そこにアロハ外間先生（八〇年）、祝叙勲川平先生、アロハ恵美子（八一年）、哀悼大城徳助氏（八七年）、祝比嘉カツ刀自風車（八八年）、祝金武朝武氏叙勲（八九年）といった琉歌会関係者をとりあげたもの、さらにはガジマル（八〇年）、デイゴ、虹、マンゴ、フラダンス（八一年）、四月馬鹿、（八五年）、バレンタイン（八六年）、大王（八七年）といったハワイの風物や行事を取上げた課題等が見られる。

次に沖縄正月、沖縄エイサー、十五夜（八〇年）、ウリジン、爬竜船、紅型（八一年）、守礼門、復帰（八二年）、泡盛、苦瓜（ゴーヤー）、風車、新北風（八三年）、清明祭、（八四年）、三月遊び、妖怪日（八五年）、沖縄、綱引（八六年）、年ぬ夜、女郎馬、御祭り、復帰十五年（八七年）といった沖縄の行事・特産品と関わりのある課題が見られる。

「ハワイ琉歌会」の歌は、そのようにハワイ、沖縄を柱にして歌われていたことが課題から浮かび上がってくるが、その他目立つものといえば夢、浮世、希望、言葉（八二年）、誠、世間（八三年）、思い（八七年）、情、愛

（八八年）といったようなものである。それらの課題は、極めて抽象的であるといっていいだろうが、生活を律した言葉が選ばれていたことがわかる。

日々の生活とかかわりのある課題としては、旅（八二年）、ピクニック（八三年）、妻、引退、母、夏休み（八四年）、父、老人、手紙（八五年）、写真、コーヒー、扇、御見舞、選挙（八六年）、芋、甘蔗、円高（八七年）、豆腐、友（八八年）、お茶（八九年）といったのが見られるが、時節や自然、草花に関するものでは春（八一年）、雨、花、雲（八二年）、山、海（八三年）、秋（八四年）、赤花（八六年）、朝（八八年）、花（八九年）といったように少なく、動物に関する課題は全く見られない。

## 7、ハワイ琉歌の特質

一九七七年の創刊から、新しい世紀を迎える二〇〇〇年まで毎月一回、ほぼ二十三年の間、『Hawaii pacific press』が掲載してきた「琉歌」を見て行くと、ハワイでなければ詠めなかったであろうと思われる歌が数多く見られる。

それは、例えば次のような歌

ヌアヌバリ登て裏オアフ観りば肝ん広々と眺みちゅらさ（七八、一、Y比嘉）

ハワイぬガジマルラハイナ一番二千坪根張り見事見事（八〇、一二、金武朝起）

鳴響むフラダンスウクレレゆ聞ちょて我身や無蔵枕夢がやゆら（八一、一〇、比嘉武信）

ハレアカラ山ぬ銀草ぬ花や世界に無ん御花マウイ誇い（八三、六、仲間源助）

侭ならん恋に胸や立ち沸じて火山なて身焼ちゆるペレぬ哀り（八四、一、川上清吉）

美ら虹山に立ててワイキキや晴りて御万人ぬ遊びどころ（八九、一、當真しせい）

これらのハワイを詠んだ歌が、まずハワイの琉歌ということでは真っ先にあげられるであろう。この部類の歌の中には、「天が下中にハワイやかすとに楽園の国やまたとねさみ」（七七、一一、知念房）のハワイ賛歌から「情知らんかや夏ぬゆむ暑さコナ風になりば肝ん詰て」（八三、八、比嘉よしのぶ）や「秋ぬ白雲や鮮なて高くコーラウぬ山ん低くみゆさ」（八四、一一、比嘉孝信）といった歌のようないわゆるハワイの時候を詠んだ歌までを含めることができるであろう。

ハワイの琉歌ということでは、次のような歌も当然その中に入ってくる。

朝や四時半にひやみかち起て汽車にうち乗い仕事行ん（八五、七、伊芸孝助）

監督ぬ苦情（ぐぐら）カマンゴーヘーゴーへ忘して忘らりみ移民ぬ苦りさ（八五、九、伊芸孝助）

ハッパイコーカチケンと難儀事やてん負きて又なゆみ我為でむぬ（八七、九、金武桃人）

思び出すさ昔ハナワイ仕事黍に水流す加減知らん（八七、九、上原芳子）

ワイナクぬ甘蔗や三曲いん曲がてスケールボーイ泣かす束ぬ多さ（八七、九、比嘉武信）

朝ぬ朝からゴーヘーぬ鞭打たり英語知やびらん大和口知らん（九〇、二、比嘉武信）

沖縄からハワイに来たのは、他でもなく稼ぎにきたのであり、彼らは「金銭や先に手紙後から」[40]の言葉で見送られ、一日も早く、故郷へ送金するために、働きに働いたのである。いわゆる「草分け移民」といわれる初期移民が残した歌は、ほとんどないといっていいが、「聞きばハッパイコーや苦りしゃどんあたる親ぬ耕地暮らし忍で哀り」（八七、一一、比嘉よしのぶ）といったような歌は、本場沖縄の琉歌ではまず見ることのできないものであろう。

移民一世の苦労は、耕地での仕事だけでなく、「朝ぬ朝からゴーヘーぬ鞭打たり英語知やびらん大和口知らん」

（九〇、二、比嘉武信）の歌に歌われていたように言葉の問題があった。そしてそれは、ハワイに渡った人が共通して味わった苦労であったといっていいだろう。例えば

外国ニワタテ知ラン人ヌ中ニ読ミ書ン知ラン情キネラン（七八、九、福元隆蔵）

アマガ言シ知ランワガ言シン知ラン手マネ足マネシ今日ン終テ（同）

英語ウビユンリ頭ルヤマチヤシガ年ヌユテカラヤイヤンナラン（同）

新移民時や言葉から仕事思いままならん朝夕苦労し（八八、一、与座仁明、ペルー）

幾年や経てん片言ぬ英語情無ん我身や童如さ（八八、一一、比嘉静江）

ハワイ州に暮らち三十昔やしが外国（ゆすくに）ぬ言葉自由にならん（九四、四、酒井英子）

といったような歌もまたハワイの琉歌の特質をなすものであろう。そこに「寺居てぬ根引ち英語ピリンパラン今前慣らわしや肝に添わん」（八六、一一、比嘉よしのぶ）といった歌や「市人会ぬ集い一二世僅か三四五世や英語音頭」（九二、四、比嘉武盛）といった歌まで含めていいだろう。

ハワイの琉歌という点ではさらに

アイラブグレンマー孫ぬキス受けて肝愛さ勝るバレンタイン（八六、四、堀田恵美子）

レイゆ掛きらりて頬にキス受きて我が孫ぬ愛やかにん嬉りさ（八八、一二、坂井敏子）

孫に騙さりて電話取て見りばエプリフールグレンマー四月馬鹿（八九、七、比嘉静江）

碧い眼ぬ孫ゆ見りば肝躍て抱ちゆる温もりや血筋やゆら（九二、八、比嘉秋子）

孫ぬ喜びやハワイ夏祭りフラダンス見ちやて手足ふいふい（九九、一一、比嘉カメ子）

といった孫を歌った歌も入れていいだろう。孫を歌った歌は、ハワイだけに見られるものではないであろうが、こ

こには、「孫ぬ肌白や嫁ゆいどやゆる片言ぬ日本語あんし嬉りしや」（八二、九、比嘉武信）といった歌が良く示しているように、ハワイで生活していることで避けられない思いが歌われているのである。

孫を歌った歌が数多く見られるということは、歌の詠者が、それだけ年をとっているということを示すものであった。そしてそのことは、必然的に、老いや死と関わる歌が多く詠まれるようになるということでもあった。

老いを詠んだ歌としては、

なしすだてあぎてだくなたんとみばゆめぬまに先や近くなとさ（七八、六、大城マジル）

とうかちぬ御祝友人ぬ上どう聞ちやる何時ぬ間になたが我身の真上に（八五、六、与儀喜厚）

月日経ち行ちゆし夢見ちやる心何時ぬ間に我身ん九十なたさ（九四、二、比嘉武蔵）

愛し夫婦やてん何時か後先ぬ涙絞る月日来ゆると思ば（九八、二、比嘉静江）

といったような歌が上げられようし、哀悼歌としては

行ちゅみ吾が友小名残りさやあしが又生り変わる節ゆ頼ぬま（九〇、四、川上清吉）

吾が夫ぬ植てるホノホノオーケットや主や居らんてん咲ちよて呉ゆさ（九一、六、仲座弘子）

天ぬ長旅や戻て戻ららん冥福ゆ祈て別りさびら（九三、五、伊波房）

三味線ぬ友や一人減いひない淋しさや肝に籠みて弾ちゆん（九九、九、島清子）

といったような歌があげられよう。

老いや知人の死と関わって詠まれた歌もまた、特にハワイの琉歌にしか見られないといったものがあるわけではない。そのことでは、とりたてて取上げるまでもないといえようが、それらの歌が少なくないだけでなく、今後いよいよ増えていくことを思えば、無視することはできない。

ハワイの琉歌にしかみられないものといえば、

夫一人頼りて写真花嫁も曾孫まで産り楽に暮ち（八〇、六、當真嗣栄）

紅型ぬ着物や我胴ぬ上に掛きて親ぬ島恋ゆる三世童（八一、一二、ホーガン八重子）

帰化なたる嬉りしや他所ぬうみ知ゆみ子孫栄てい笑い福しちょてい（八三、一、Y比嘉生）

一世ぬ引退者マルヒヤに通ゆて社会奉仕しやべて今年十年（八四、二、新里リサ）

戦さ世や終わて世や替りがわり忘りてんなゆみ二世ぬ手柄（九二、六、仲村渠喜代子）

異郷ぬ土になる覚悟しち居てん日本国籍と別りぐりしゃ（九四、一、アリソン信子）

歌小詠みならて沖縄口ならてかにん嬉しさやハワイ二世（九四、三、比嘉カメ子）

苦るしさんにじてらちやるお陰じ二世三世栄る嘉利吉ハワイ（九六、七、金武桃人）

軍人花嫁や五十年迎けて今や此ぬ島に花ゆ咲かす（九七、九、瀬川晴子）

四世ぬ結婚祝や各国人種集りて御馳走までん替て箸や動かん（九八、五、比嘉秋子）

といった歌をあげることができよう。

二世、三世、四世、帰化、写真花嫁、軍人花嫁を歌った歌は、ハワイの琉歌を特徴づけるものといっていい。

ハワイの琉歌は、そのように多様な広がりのあるなかで、日々の思いを詠みこんでいるが、ハワイの琉歌を特徴づけているものといえば、何といっても、次のような歌であった。

タンタラスのぶてながみゆるちちにたぬでふるさとにいえいむたさ（七八、二、与儀喜厚）

ポーリッジセンター人混みぬ中にかなし島くとばちゃがいかな（七九、一〇、Y比嘉生）

沖縄偲ばしゅる慈光園ぬエイサー見りば懐しやど先に立ちゆる（八七、八、比嘉よしのぶ）

カーブ三ち越えて行ちゅるハマクアや昔名護まがい歩むぐとさ（九二、九、仲座弘子）

沖縄ぬ二月や腰休きーぬ行事憶び出すさ昔わらび舞うい（九六、五、當真嗣正）

この範疇の歌としては「故郷ゆたちんじていく年やなてん生りたる島や忘りぐりさ」（七八、二、照屋孚俊）のような歌から「童正月や待ちかんて嬉れさ思ひ出ざすさ今ん十三祝」（八〇、四、當真嗣栄）のような歌まで含めていいだろう。故郷沖縄のことが何かにつけ思い出されるというものであり、ハワイの風物を詠んだ歌とともに、多く見られるものである。

ハワイの琉歌は、そのように、ハワイの風物を詠んだ歌を始めとして、ハワイの時候、初期移民の労働、言葉の苦労、孫、老い、死別といったハワイの生活が歌われた歌、そして沖縄を偲んで歌われた歌とがあったが、ハワイの琉歌には、何故か恋歌があまりみられない。

琉歌の中で最も精彩を放っているものといえば間違いなく恋歌であるといっていいだろうが、その恋歌がハワイの琉歌では影が薄い。しかし、その影の薄いなかで、恋歌を歌い続けたのが一人だけいる。与儀喜厚である。

里がめる夜やゆす見えんぐとになさきあて月んくむてたぼり（七九、一）

我肝あまがする四ツ竹ぬ音色無蔵いちゃて恋路かたて見ぶさ（八〇、三）

さやか照る月んしばしかきくむてしぬで行くうえだや照らち呉るな（八三、一〇）

情ねん山やすばに押しぬきてい里が島朝夕ながみぶさぬ（八四、三）

与儀の恋歌の、もと歌をさがすのはたやすいだろうが、そのことよりも、与儀が琉歌の肝心な点をよく知っていたことを賞賛すべきであろう。ハワイの琉歌詠者のなかで貴重な存在であったことは疑い得ない。

一九九一年十月仲間源助は「与儀喜厚先輩や九十四ぬ長年ん楽園ぬハワイ居て天国い参ち」といった歌を歌って

いた。仲間の追悼歌からわかるように、与儀は長寿であった。八十歳を越えてまだ恋歌を詠んでいたことにその秘密があったといえるかもしれない。

## あとがき

一九八一年二月一日付『Hawaii pacific press』は、外間勝美の「布哇に生きる」と題された次のような歌を掲載している。

一、我等が家は五大州柳行李を引っかたみはるばるハワイにちゃーびたん
二、心は沖縄身は布哇夢は故郷の親ぬ側涙に濡れる木の枕
三、鳴らすキャンプの鐘の音泣く泣く起きやい原すがいウドン汁小かちくまーい
四、弁当、水瓶、雨合羽肩にかきやい宿出じてカチケン、ホーハナ、ハッパイコー
五、汗水流ち働らちゃい受来る勘定や金ダラー親に送やい肝いそしさ
六、する中頼母子はい落ち島ぬ妻小ん呼び寄して産し子んだんだん生りやい
七、育てる苦労は楽の種子今や子や孫打ち揃るて朝夕笑らとて暮らちょやびん

「布哇に生きる」は、沖縄からハワイにやってきた移民の生活を歌ったものである。柳行李一つで大海を渡り、故郷恋しさに枕をぬらしながら、砂糖耕地で懸命に働き、儲けた金は仕送りし、纏まった金を作って妻を呼び、やがて子供が生れ、今では孫も出来、笑いが溢れる幸せな日々を暮らしている、というのである。

「口説」形式になるこの歌が、沖縄移民の典型的な姿を詠みこんだものになっているのは、呉屋真苅の「苦労し

た移民の生活―労務者から独立事業家へ―呉屋真苅米寿翁の回顧談」[41]などから窺い知ることができる。例えばそれは「ねじをかけた目覚ましの時計が朝三時半にはがんがん鳴り響く、はっと飛び起きて〝七転びくるで、冷やみかち起きて、わした沖縄世間に知らさ〟と云う歌を思い浮べて、ケチンに走り行き、薪に石油をかけて火を起し、ご飯を炊く。おかずはうどん汁からうどんを掬い上げ、おかず箱に詰めて醤油をかけて弁当に作る」といった話などがそうだが、呉屋は、回顧談の中で砂糖耕地に入り、事業を起し、米寿を迎えるまでの半生を語ったあと「最後に〝苦難のホレホレ〟の琉歌で終りたい」として、そこに次のような歌を付していた。

一、苦しみ◇◇忍でホレホレゆさしが　今や楽向かて嬉さびけい
二、忍ぶしや産みの苦しみどやゆる　やがて倖のあらでもの
三、哀れしやいつた楽や何時までん　泣かん如とちばりわした友び
四、人の行く道や下り上いともり　苦しみや楽の産みの親ですもの
　恩みはまい見そり楽や目の前

「ホレホレ」というのは「キビの枯葉をむしり取る仕事」[42]のことである。呉屋は「このホレホレは苦しい仕事で、先輩移民の内地人間には、この仕事を歌でまぎらす〝ホレホレ節〟が生れたほどであった」と語り、自作の「苦難のホレホレ」を発表していたのである。

「苦難のホレホレ」は、仕事の辛さを歌った歌ではなく、辛い仕事こそ楽の元であるといった教訓歌で、呉屋の琉歌の特質のよく現れた作品であった。

ハワイで詠まれた「琉歌」ということでは、外間の「布哇に生きる」や呉屋の「苦難のホレホレ」のような作品があるだけでなく、次のようなのもあった。

一、世界や果なしぬ　船路旅心　夫婦やか外や　頼いならん（かなし夫婦船）
二、夫や帆柱に　妻や船心　如何る波風ん　共どやゆる
三、船と帆柱や　浮世風まかし　極楽ぬ港　着ちゆる間や
四、互に肝合わち　走り夫婦船　時ぬ来る迄や　漕がねなゆみ
五、頼るなよ誰ん　夫婦かながなと　日々ぬ暮し方　笑い福い

比嘉盛勇の「夫婦船」と題された歌である。

比嘉は「沖縄民謡の作詞を続けている人としてハワイの沖縄コミュニティでは既に知られている」[43]人であった。「夫婦船」は、亀谷朝仁の作曲で人々に愛唱されている、いわゆる「島歌」である。

ハワイの琉歌は、ハワイの琉歌会の会員たちによって詠まれ、『Hawaii pacific press』の琉歌欄に掲載された琉歌だけではない。外間、呉屋、比嘉などが詠んだような歌も、数多く残されているのである。本稿ではそのような歌について触れる余裕はなかったが、ハワイの琉歌史を万全なものにするためには、そのような歌も落とすわけにはいかないであろう。

注

1　一九七七年十一月三十日発行。編集兼発行人仲嶺和夫。

2　「琉歌」は比嘉良信、与儀喜厚、川上善子、知念房、呉屋真苅、「詩」は金城仁政、小説は外間勝美作「ローカル小説　哀しき宵春」を掲載している。

3 明治、大正期の沖縄の新聞には琉歌結社の詠草集「琉歌」の掲載が見られた。明治期の新聞掲載琉歌については仲程昌徳　前城淳子編著『近代琉歌の基礎的研究』（平成十一年一月、勉誠出版）に詳しい。

4 湧川清栄「布哇沖縄人五十年史抄」（『おきなわ』第十号、一九五一年三月十日発行　ハワイ特集号）所収。

5 時代区分は『ハワイ日本人移民史』（一九六四年四月二十日発行　ハワイ日本人移民史刊行委員会編集　布哇日系人連合協会発行）「写真編」の時期区分による。

6 『ハワイタイムス　沖縄移民七十五周年　国際海洋博覧会記念号』「祝沖縄移民七十五周年・EXPO75」参照。

7 比嘉静観「ハワイ琉楽初期の歴史」（比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌　ハワイ沖縄人七十八年の足跡』所収　一九七八年十二月十五日初版　布哇ヘラルド社印刷製本）

8 比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌　ハワイ沖縄人七十八年の足跡』（一九七八年十二月十五日初版　布哇ヘラルド社印刷製本）は、「募集琉歌当選作品」として、入選歌五首、歌作五十七首を収録している。

9 崎原貢『がじまるの集い　沖縄系ハワイ移民達の話集』（一九八〇年十月三十一日発行　発行者がじまる会　印刷所布哇ヘラルド社）「呉屋真苑」参照。

10 玉代勢法雲「布哇に於ける沖縄救済事業」『おきなわ』（第二巻第三号　ハワイ特集　昭和二十六年三月十日発行　編集兼発行人神村朝堅）所収参照。

11 外間勝美「沖縄救援こぼれはなし」『移民は生きる』（比嘉太郎編著　一九七四年二月二十日発行　日米時報社発行）所収。

12 同号には志喜屋孝信「在布同胞の皆様へ　感謝と年頭の辞」も見られる。

13 「帰化をどう思ふ」として組まれた特集に答えて寄せられた名護、比嘉、玉代勢の随想は、三者三様で、興味

深いものがある。

14 町の話題といった形で取上げられている。

15 山入端（不明）「本特集号の編集に當つて」

16 『おきなわ』第二巻第三号、通巻第十号　昭和二十六年三月十日発行。

17 「病床日誌の一節」（明治四十一年七月七日。『琉球新聞』所載。『伊波普猷全集第十巻』所収）で、伊波はよしやの「鳴ゆる物聞かぬ」の歌に触れて「これは大方よしやがこの世を去らうとした時、来世の存在に就いての感じを語つたのであらう。一体人の霊魂はその体力の衰へるにつれて、益々光沢を増すのでは無からうか。仏蘭西の詩人であるビクトル・ユーゴーが来世の存在に関していうた言葉の一節にも／わが生涯の終りに近づくに及んで、他界の美音益々明瞭にわが耳に達するを覚ゆ。／といふやうな言葉があつたとおぼえてゐる。よしやも亦仏蘭西の大詩人の驚くべき妙音を聞いたのだ」と書いていた。

18 一九一九年一月一日付『布哇タイムス』

19 一九八四年五月『早稲田文学』に笑受子の「琉球演劇　手水の縁」が見られる。

20 「新年随筆」として掲載されている。

21 『布哇タイムス』一九四八年一月一日号。

22 山中速人著『ハワイ』（一九九三年七月二〇日発行　岩波書店）「Ⅶ　ハワイアン・ルネッサンス」の章参照。

23 その月に初めて登場したことを示す。

24 「文芸」と記載していたのが七八年の二月号から「学芸」の記載にかわり、八三年二月号からもとに戻って「文芸」となる。

25 一九七九年十二月十五日。

26 「書記録は語る」二月十二日の項参照。『琉歌集　ハワイ琉歌会創立一周年記念』（一九八一年九月吉日発行、発行者ハワイ琉歌会、責任者比嘉武信、印刷所布哇ヘラルド社）所収。

27 「ハワイ琉歌会五年の歩み」（『祝日本人官約移民百年祭　ハワイ集琉歌会同人集　創立五周年記念誌』一九八五年七月吉日発行、発行ハワイ琉歌会、印刷製版布哇ヘラルド社）参照。

28 Misako Funakosiの翻訳は、『Hawaii pacific press』八月一日号に掲載された「火山」作品ではない。

29 ハワイの琉歌についてのもっとも早い紹介としては外間守善の「ハワイの琉歌」（『沖縄文化』五四～五九、五六は「比嘉春潮先先追悼特集号」のため休載、一九八〇年～一九八二年、五回）がある。

30 「十一月課題　霜月」となるべきなのを、昨年十二月の課題をそのまま記した単純な間違いである。

31 比嘉良信「課題と主な協議事項」一九八七年度五月の項（『祝沖縄移民入植九〇年祭　微風　ハワイ琉歌会創立十周年記念誌』一九九〇年吉日発行　編集比嘉良信　発行ハワイ琉歌会　印刷製版布哇ヘラルド社）

32 「衣の袖から鎧が見える」比嘉武信『比嘉武信の雑炊日誌』二〇〇四年四月十九日発行　琉球新報社。

33 「ハワイ琉歌会五周年記念誌裏話」『Hawaii pacific Press』一九八五年十一月一日号。

34 比嘉は「会員の御蔭です」（『祝沖縄移民入植九〇年祭　微風　ハワイ琉歌会創立十周年記念誌』所収）の中に「一九八七年より会の運営を比嘉良信君、屋比久ゆき子さん、比嘉静江さん達にお願いし、自分は「在布沖縄人九〇年の歩み」探索をライフワークとして専心させて頂いています」とあるのが見られる。

35 比嘉は「在布沖縄人九〇年の管見」『比嘉武信の雑炊日誌』の中で「『在布沖縄人九〇年の歩み』を克明に筆写収録すべく、一九八七年二月より、一九八八年十月現在まで、ビショップ図書館に日参し、布哇タイムス、布哇

ヘラルド両邦字新聞の、一九〇〇年から一九九〇年までの沖縄関係記事を追っかけています。／『九〇年の歩み』は予想日程を遥かに上廻って、十年事業になりそうです」と書いていた。

36 『比嘉武信の炊飯日誌』に収められている。

37 比嘉良信は「発刊に寄せて」（『アロハ』一九九三年吉日発行、編集比嘉良信、発行ハワイ琉歌会、印刷製版布哇ヘラルド社）で、「十三周年記念とは、郷土沖縄の年祝（としび）の十三祝いに因んで命名した記念式典のことで、恐らく社会に於ける始めての事ではないかと思うものであります。というのは今日までに十三周年記念の行事の催しは聞いたことがないし、とにかく外国では十三の数字が忌み嫌われている事もある。けれども沖縄では昔から十三祝、と言う素晴らしい年祝いがあるから、それに因んで十三周年記念を挙行したのである」と書いている。

38 「ハワイ琉歌会」の名称を用いたのは「会員の御賛同により従前通り「ハワイ琉歌会」に決定というのが「ハワイ琉歌会回顧録　幹事比嘉良信」（『アロハ』）に見られる。

39 一九八九年五月一日に掲載された「三月作品「お茶」」の作品集の最後に「四月以降十二月の課題は「雑詠」です」とある。

40 久高将光「移民親ぬちゃや金銭や先に手紙後からや昔言葉」（八五、一二）の歌は、「金銭や先に手紙後から」は、すでに昔の言葉であると歌っていた。

41 「沖縄移民七十五周年国際海洋博覧会記念号」一九七五年一月一日付『ハワイタイムス』

42 金城仁盛「アロハ」（比嘉太郎編著『移民は生きる』一九七四年二月二十日、日米時報社）

43 『ハワイ・パシフィック・プレス』一九九一年一月一日「「夫婦船」沖縄でブーム　比嘉盛勇氏の作詞」。比嘉盛

勇著『米寿記念作品集』一九八九年十二月三十日発行、印刷所布哇ヘラルド）

（※）『日布時事』は一九〇六年十一月『やまと新聞』（一八九五年十月創刊）を改題。一九四二年十一月二十日『布哇タイムス』に改題。『布哇報知』は一九一二年七月創刊。一九四二年十月二十三日から英字版は「ホウチ」に「ヘラルド」を重ねる紙名にしているが、十一月三日から「ホウチ」が消え、「ヘラルド」だけになる。邦字版は「布哇報知」のままであるが、本稿では一九四二年の改題前までは『日布時事』『布哇報知』を用い、以後は「布哇タイムス」「布哇ヘラルド」を用いた。